

---

In the Returned Time-**戻された時の中で-**

紅月 時夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

In the Returned Time - 戻された時の中で -

### 【Nコード】

N1880I

### 【作者名】

紅月 時夢

### 【あらすじ】

守るべき神が消えて、残された時間では倒すべき混沌の神を倒すことが出来ない。うなだれる調和の戦士たちの前に現われたのは？彼らが提示した破格の条件。それが受け入れられた時、時は戻り、すべてが元に戻る。1人の調和の戦士の居場所と引き替えに…。

彼は何を思うのか。

敵対し、すべてを忘れた彼らに、再びの出逢いはあるのだろうか…

…？

## 序幕（前書き）

これはDDFFのパロディです

パロディが苦手という方がいらっしやると思いますので、無理な方はこの時点で引き返すことをお願いします

その上で進まれる方のみ、本編へとお進み下さいませ

## 序幕

幾星霜もの時続いた闘いは終わりを告げた  
調和の神の消滅という形で終幕を迎えた  
しかし

混沌の戦士が動き出す

再びの声を上げた闘い  
ただ いるべき場所に  
とある一人の青年の姿はなかった  
誰の中にも残ることなく  
彼の居場所は姿を変えた

彼を覚える神は  
ただ一人 光の中で涙した

彼を忘るる者たちは  
彼を倒そうと躍起になった

記憶を封ぜられた彼は  
記憶を封ぜられたかつての仲間と戦い  
記憶を持つかつての敵と共にいた

必然だったのか  
それとも  
偶然だったのか

誰にもわかることなく  
巻き戻された時は流れゆく

一人の居場所と引き換えに戻された時の中

変わらぬ道を進んでいると気付かぬまま進む者たち

さあ 幕開けだ  
開幕された再びの戦い（アンコール）はどう転がるのか

鍵を握るは闇の戦士

鍵を壊すは光の戦士

そして 世界の命運を握るのは  
…

少しずつ違った道を歩んでいく  
転がる歯車は  
また別の道を進み始めた

それを止めるは 光か 闇か  
調和か 混沌か

舞台は整った  
同じで異なつた最後の戦い

始めようじゃないか…

## 第一幕 願いと祈りと悲しみと

希望を持って集めたクリスタルは  
救いたかった神を消した  
だが 残酷な真実の奥にあった神の本音  
それは

世界を混沌の手から救うこと

しかし 残された時間は僅か  
もう混沌の神を倒す時間が存在していなかった

絶望する光の戦士はただ思う  
消えた後の世界のことを  
消えた後の自分のことを

世界は混沌の手に墮ち  
混沌に染まり  
破滅への道を辿るだろう  
自分たちは消滅し  
二度と戻ることはないだろう

予想される最悪の未来を前に  
しかし戦士たちは  
何もすることが出来ずにいた

既に時は満ちていた。

混沌の神・カオスは世界を滅ぼすべく動き始めていた。

光の戦士たちはそれを止めるために走っていたが、消えゆく光に、その歩みは止まりかけていた。いや、止まらざるを得なかった。

手にするクリスタルから伝わる光の流れ。それが弱まっていくのを感じていた。

そんな十人がいたのは、変わり果てた空の下の荒野だった。

苦しい様子ではないものの、彼らからは確実に光の加護が失われている。

「いつまで、俺たちは保つんだらうな……」

そう、ポツリと呟いたのはフリオニール。

既に何度も彼らは消えかけている。それこそ、これでもう終わりかもしれないと思いつながら。

「コスモスが託してくれた力。私たちがじゃ活かしきれなかったのかな」

悲しそうなテイナの言葉に誰もが俯いてしまう。

否定することなど出来はしない。実際に自分たちは残された時間を活かすことが出来ず、混沌の神を倒せないまま消えようとしているのだから。

「元々、コスモスには厳しかったのだろうな」

ウォーリアの言葉に、何人かが顔を上げた。

「カオスとの戦いに敗れ、あちこちに散った我々を繋ぎ止めた上に、何かあることに我々を導いてくれた。その最中に生み出されたのがクリスタル。これが、彼女に残されていたすべての力だったのだろうと思う」

自らの手にあるクリスタルを見つめ、ウォーリアは静かに語る。

「間違いないだろうな」

肯定の意を示したのはクラウドだった。その隣でスコールも言葉なく頷く。

「コスモスは自分の限界を知り、俺たちに力を託したのは間違いなことだ。このクリスタルに込められた力はコスモスの限界まで高められたものだろう。文字通り、命を懸けた……」

直後、クラウドに繋げるように口を開くスコール。

「世界の命運を、コスモスは俺たちに託した。それが正しかった…とはこの状態からすれば言えないかもしれないが、その時は最善だった。俺たちがコスモスが消えた今も尚存在していられるのもコスモスのおかげだ」

誰もが三人の言葉を復唱している。

脳裏によみがえるのは助けてくれたコスモスの姿。力を託し、世界の命運を任せてくれたコスモスの姿。

そして、カオスの力に消えたコスモスの姿。

「コスモス、最期に笑ってたよな」

空を仰ぎながらジタンが呟く。

その瞳に映っているのは赤く染まった空ではなく、コスモスの姿。

「とても柔らかくて、まさに母って感じの」

目を閉じるとジタンにはありありとそのコスモスの笑顔が浮かんだ。それは他の九人も同様で。

「思えば、コスモスはいつも笑ってたっすね」

自分たちの前に現れ、助言を与えてくれたコスモスは微笑んでいた。ティーダはそれを思い出す。

「信じてくれてたんだよな、俺たちのこと。今も……そうなのか？」

バツツの問い掛けるような言葉に答える神はもういない。誰にも、この問いの答えはわからないのだ。

二度と、知りえることの出来ないこと。

「知ることは出来ない。わかることも出来ない。想像するしかないんだ、僕たちは。残された時間に出来ることなんて、もう少ないかもしれないけど……」

「わからないけど想像は出来る。…うん、僕はそれ、いいと思うよ。気に入った」

オニオンナイトの言葉にセシルは同意を示す。

誰もが気持ちは同じだった。

コスモスが今どう思っているのか知りたいという思い。今はもう実現はしないが。ただ、自分たちが消えると、もしかするとコスモスと同じ場所へ行けるのではないかという淡い期待を持っていた。それこそ実現しないだろうと、どこか自嘲気味の笑みを浮かべながら。

「また、か…」

光が飛び出したのはジタン。苦し気に顔を歪める。いっぱく置いて、ティナからも光が散っていく。

「もう、これで終わり、かな」

自分の手を見ながら呟くティナは苦し気だが寂しそうだった。ジタンとティナ。二人のクリスマスが一度瞬く。すると、そこにはまだ二人の姿があった。光の散らない姿が。

「まだ、大丈夫なのか？」

ジタンがしっぽを振って体が動くことを確認する。

「私たち、意外としぶといのかもしれないね」

クスリと笑みを零したティナに、僅かだが場の雰囲気明るくなる。

「最期がいつかはわからないが、近いことは確かだ。暗くいくより、明るい方がいいかもしれない」

「それ、スコールが言えるっすか？」

ティードが盛り上げようとスコールの言葉に突っ込めば、自然と零れるみなの笑顔。

「それは当たってるかも。普段からスコールって静かだし冷静だし、そう言うのって意外だよな！」

すかさずバツツも便乗する。

さっきまでとは一転し、明るくなったみなの表情。久し振りに見た笑顔に、それぞれの心も明るくなっていった。

しばらくの談笑。

それは終わりが近いということに切羽詰まっていた彼らの心に安らぎをもたらしていた。

しかし長く続いたそれは、突如の来訪者によって終わりを迎える。

その来訪者に気付いた者は四人だけだった。

サツと手に武器を出現させ構えると、他の六人も異変に気付く。

四人の見据える先を見れば、四人のカオスの手先。光の戦士たちもそれぞれその手に武器を出現させた。

カオスの戦士の内一人、ガーランドが自分たちが現れたことに気付いた四人　　ウォーリア、フリオニール、ティナ、クラウドを見やる。

「光が消えつつも、我らの存在に気付けるだけの力、まだあるようだな……」

嘲笑とも関心とも取れる笑い声を零すガーランドに、十人の表情は険しくなる。

「今のお前たちに我らが倒せるものか。光を失い、動くこともままならなくなっている者共よ」

杖で地を叩きながら笑う皇帝は明らかに十人を見下している。

「ホント、僕ちんたちに壊されてればこんなことにはならなかったのにねえ。どう？今からでも壊されない？」

笑い転げながらケフカのその瞳に浮かぶのは明らかな狂気。

「我々はお前たちに消されるつもりはない！」

はつきりと言い切るウォーリアの言葉に一同は頷く。

「その強がり、いつまで持つか見物だな」

蔑みの念を込め、言い放つのはセフィロス。

「お前たちの思い通りになどさせるものか！」

剣の切っ先を四人に向け、フリオニールは睨みを効かせた。

「他愛の無い。我らはお前たちと取り引きに来たというのに」

「取り引きだと？」

ガールランドの言葉にウォーリアが問い返す。

みな様々な反応を示すが、いぶかしげに四人を見やるのは同じ。

「あんたたちと取り引きなんかして、僕たちに得なんかあるものか！」

「そつだ。今までお前たちと関わってまともなことをされた覚えはないぞ！」

オニオンナイトが小柄な体とは対称的に大きく声を張り上げ、バツツが同意を示した。

「そんなこと言わずに取り敢えず聞いてあげばいいのさ。それを受け入れるかどうかなんて、そこから決めても遅くない。あ、もう消えそうだから時間なんてないのかな？」

「ケフカ、心配は無用です。何のために私がここにいると思うのですか」

ケフカの言葉に答えるようにして突如闇から現れたのは、時を操る魔女・アルティミシア。

「アルティミシア…お前もいたのか」

憎々しげに呟くスコールは、一人静かにアルティミシアを睨んだ。

「……俺たちが消えないのは、あんたが俺たちの崩壊を止めているからか」

今まで黙ってセフィロスに向けていた視線を、クラウドはアルティミシアへと向けた。

「正しくもあり、間違いでもある。正確には、私たち以外のすべての時を止めたのです」

気付いていなかった何人かがハツとして周りを見る。

雲は動かず、風は吹いていない。よく見れば、時が止まっていることは明らかだった。

「時が止まっているということは、俺たちは逃れることが出来ない……ということか」

クラウドが続けた言葉にバツ、ジタン、ティーダの三人が目を見開いた。

「どちらにせよ、僕らは彼らの話を聞かなくてはならないようだね  
…」

セシルは構えた剣を下ろさず不満げに呟いた。

「物分かりの早い奴がいると助かるものだ。早速、取り引き内容を話してやるう」

皇帝は相変わらず人を見下す態度を変えない。

逃げられないとわかった以上、光の戦士たちは聞きたくなくとも話を聞くしかなかった。悔しいが、先ほど皇帝が言った通り、戦って勝つことはすでに彼らには不可能だった。

「我らがお前たちに提示するのは、時を戻すことだ。お前たちが散り散りになる前の時に」

「何だつて?!」

ガーランドの言葉にティーダは驚きの声を上げた。

「そんなこと出来るわけが」

「出来るんだよね」

ティーダの言葉をさえぎったのはケフカ。

「神龍の力、そしてアルティミシアの力を使えば造作もないこと」

放たれたセフィロスの言葉に、光の戦士たちは言葉もない。

もしもガーランドやセフィロスの言葉通りその時に戻るのであれば、  
コスモスも復活するはずだ。」

「でも、それをお前たちは無償で行いはしない。何が目的だ！」

「ああ。お前たちカオス軍勢が俺たちだけが得するようなことをするはずがないからな」

「俺たちに何をさせる気なんだよ！」

ウォーリアの的確な言葉に続き、フリオニール、バツツの言葉が飛ぶ。

「よくわかっているな」

ガーランドの言葉に続き、

「お前たちの見返りは……」

皇帝が続け、

「お前たちの仲間の一人が」

ケフカが続け、

「その身を差し出し」

アルティミシアが続け、

「カオス軍に入ること、だ」

セフィロスが続けた。

『！……！』

思いもよらぬ彼らの言葉に絶句する。

「さすがのお前たちも言葉も無いか……」

クッククツクツと笑うセフィロス。他の三人も同様に笑みを浮かべている。

「……それが、誰がお前たちの仲間になんか！」

そう、言葉を放ったのはジタンだった。

「一人」

静かに響いた声。

「一人がこちらへ来れば、他の九人、そしてコスモスも助かるのですよ？」

アルティミシアの言葉がその場を駆け巡った。

「私……」

胸の前でギュツと手を握りしめるティナ。昔、自分がケフカに操られたことを思い出したのだ。

「誰かの犠牲の上に成り立つ生など必要ない！」

スコールの激しい言葉が飛ぶ。

ティナはハツと顔を上げる。自分は誰かの犠牲で生きたくなどない。それはみなも同じだろう。ただ、考えてしまったのだ。もしも自分が行くことでみなが助かるなら……と。しかし、それは誰も望んでいないこと。犠牲の上に成り立つ生を、誰も望んでなどいない。

「誰か……か。その誰かはもう決まっておる」

ガーランドの言葉に一同の顔色がサツと変わる。

その様子を見たケフカはゲラゲラと笑い転げた。

「勝手なことを……！」

セシルの怒気をはらんだ声が響くも、カオス軍の五人は涼しげな顔をしている。

「むしろ感謝してほしいものだ。お前たちに決めることなど不可能だっただろうことを、我々が決めてやったのだから」

「仲間を犠牲にしてなんになる！」

皇帝のあまりな言葉にバツツが叫ぶ。

「さあ、その誰かだが、私が来ているのはその理由のみだとも言えは………わかるだろう？」

セフィロスが浮かべる不敵な笑み。そんな彼の視線に絡めとられたのは、

「また………また、お前の人形となれと言うのか。セフィロス」

「よくわかっているな、クラウド」

クラウド、だった。



「誰がお前たちの所になんか」

「お前が来れば他の者たちはおるか、コスモスも助かるぞ？」

「っ！！」

自分が犠牲になればみな助かる。

救える。

それはとても甘美なる響きで、どうしても心を揺さ振られる。

それが如実に現われているのか、瞳が大きく揺れていた。

「クラウド、行くな。お前が犠牲になって助かって俺たちは嬉し

くない。コスモスだってそのはずだ」

「フリオニール…」

肩を掴み、戸惑うクラウドを引き止めようとするフリオニール。

「そうっすよ。もう消えるしかないんなら、それが俺たちの運命。

それが俺たちの物語っす！」

「僕たちは共に戦ってきた仲間。仲間だからこそ、こんなところで君を失いたくない」

「ティーダ、セシル…」

共に旅をし、支えてくれた仲間たち。

「私も、前に敵の方にいたからわかるよ、クラウドの気持ち。それ

に、行けば助けられるって葛藤する気持ち」

「でも、行っちゃダメだよ。それにさ、行ったからって本当に助けるような奴？あいつらって

「テイナ、オニオンナイト」

旅の途中で再開し、共に戦った仲間。周りを見れば、共に行動をとっていないとも、一つの目的のために戦ってきたかけがえのない仲間たち。

失いたくはない。

でも、それ以上に彼らを困らせたくなくて。

ともに居たくて。

「とんだ茶番だな」

水を注すように響いてきた声にクラウドは振り返る。

「仲間を助けたくはないのか？」

セフィロスはクラウドに鋭い視線を向けながら言葉を紡ぐ。その視線にさらされていないオニオンナイトとジタンがすくんだ。

ガールランド、皇帝、ケフカ、アルティミシアは何も言わない。すべてを見越しているかのようにただ笑っているだけ。

「仲間は助けたい……でも、あんたたちの思い通りにはならない！」

「私たちは仲間の犠牲の上で生きはしない」

「俺たちが消えようとも、それは受け入れるべき事柄……」

「俺たちの進むべき道は、俺たちで決める！」

ウォーリア、スコール、ジタンの言葉が響く。同意するように他のみなも頷いた。

「クラウド…」

名を呼ばれ、クラウドは再びセフィロスを見据える。そこには、先ほどよりも冷たさを増した瞳があった。

「お前はまた、仲間を見殺しにするのか？」

セフィロスのその言葉に、クラウドの瞳は音を立てて凍り付いた。それこそ回りにいる仲間に、そして離れているカオス側の五人にまでわかるほど明白に。

クラウドが手に持っていたバスターソードは滑り落ち、鈍い音を立てて地にぶつかった。

「おい、クラウド？」

ティーダが焦りながら呼びかけるも、クラウドは何の反応も示さずにただセフィロスを見つめている。

そんなクラウドの様子に満足したのか、セフィロスは続けた。

「お前の仲間たちを救うことが出来るのはお前だけだ。救える者を救わない…また、あの二人と同じようにお前は見殺しにするのか？」

ゆっくりと言い聞かすように紡がれる。

胸に深く突き刺さる言葉は確実にクラウドを追い詰めていた。名を必死に呼ぶ仲間の声は届いていない。

彼の脳裏に蘇っているのは雨の日に親友が死に逝く様と、自分の前

で殺され、腕の中で冷たくなっていく仲間の姿。  
見殺しにしたと、ずっと深く思っている二人の最期の姿。

「お前がこちらへ来て昔のように私の人形となれば、少なくともその仲間たちは消えずにすむぞ？」セフィロスの言葉がまるで麻薬のようにクラウドの脳を揺さ振った。

自分が犠牲となることで助けられる。

今度は自分が助けることが出来る。

しかし、どこかから聞こえてくる仲間の声に呼び止められるのだ。

犠牲の上で生きたくない、と。

彼ら側に行くな、と。

消えるのは受け入れるべき運命だ、と。

そして何より、自分を必死に呼んでいる声。

クラウド、と、仲間たちが呼んでいる。

突然、クラウドは何か衝撃を受け正気に戻った。

よるける体を保ち、顔を上げればそこには、微かに強ばった表情をしたスコールが立っていた。

じんじんと熱く、痛みの走る頬に、スコールに叩かれたのだと気付く。感覚からするに、おそらくは平手打ちだろう。回りにいる仲間たちもみな同様に驚愕の表情でスコールを見つめていた。

「ス…コール？」

どこかぼんやりとしていた頭が少しづつはつきりとしていくクラウドは、目の前に立つ仲間の名を呼んだ。

「正気に戻ったか」

スコールは軽く安堵の息をついた。

久し振りに聞いたように感じる声がクラウドの耳を打つ。

「俺は、一体何を…？」

ただ啞然と立ち尽くすクラウドは、ハッとセフィロスへと視線を向けた。

相変わらず彼らは笑みを浮かべていた。

「クラウド、大丈夫？」

「…ああ」

セシルの心配げな呼び掛けに、クラウドは視線を動かさずに答えた。

「今のでこちらへ来ていれば、苦しまずにすんだものを」

セフィロスの言葉にクラウドの瞳に再び険が宿る。

「クラウドをカオス側になど行かせはしな…クッ！」

不意に途切れたウォーリアの声。  
不自然に思ったみなはウォーリアを振り返った。

「つつ！」

その場に膝をつくウォーリアから通常よりも早く散りゆく光。

「わっ！」

そして、ティードからも光が散っていく。

「どうして……まさか！」

スコールが五人を振り返り、アルティミシアを睨み付けた。

「貴様、二人の時を速めたな！」

「手っ取り早いのですよ、スコール。彼の記憶を呼び覚ますには」「  
「始めから仕組んでいたな」

クラウドを指差すアルティミシアを一度キツく睨み付け、クラウド  
へと視線を移す。

彼はウォーリアとティードを見ていながら、どこか遠くを見ている  
ようだった。

「クラウド……つつ！」

スコールからも光が飛びだす。他の仲間たちからも散っていく光。  
苦しむ仲間たちが、クラウドの脳裏で助けられなかった二人と被っ  
ていく。そして、クラウド以外の光の戦士たち全員から光が散って

いく。

「クラ、ウド…自分を、保つんた！」

必死にジタンが呼び掛けるも、自分は消えずに目の前で仲間たちが消えようとしている現状に、果たして自分は耐えられるだろうかと思ってしまう。自分だけが助けられるとしたら。もしも自分がクラウドであればどうだろう、と。

身動き一つしないクラウドの様子に、みな不安を覚えていた。

苦しむ仲間たちが助けられなかった二人と被る。

指の隙間から零れ落ちるように消えていった二つの命。そして、今まさに零れ落ちようとしている九つの命。

助けられるのが真実自分一人なのだという現状。そこに行き着いた時、クラウドの中で何かがはじけて壊れた。

「やめろっ!」

血を吐くような悲痛で大きな叫び。

ハッと顔を上げた光の戦士たちが見たものは、クラウドの苦しく歪められた表情に、固く握られた両拳だった。

「俺が、そっちへ行けばいいんだろっ…」

どこか諦めたような声に、九人は息を呑み、五人は笑みを深くした。皇帝が軽く手を挙げると、アルティミシアが再び九人の時を止める。彼らの消滅は免れたようだ。ただ、ひどく消耗したようで、あまり

動くことは出来ない。

「行くなって、クラウド。行ったら駄目だ！」

バツツの音が飛ぶが、それは虚しく響くだけだった。

「お前に光は似合わない」

セフィロスの言葉に、クラウドはビクリと肩を震わせた。

「お前の居場所はそこではない。そうだろうか？」

突き付けられる言葉すべてが、クラウドを追い詰めるための材料だった。

「俺は…」

目の前でこれ以上失いたくない。

助けられるなら助きたい。

例え自分が犠牲となろうとも。

彼らの望まぬ犠牲となろうとも。

「待って、クラウド！」

ティナが叫ぶが、きびすを返したクラウドは振り返らない。  
先ほど落とした剣を拾うと、一度立ち止まってクラウドは言った。

「今までありがとう。みんなと共に戦えてよかったと思っている。  
……じゃあ、な」

静かな、感情を押し殺したような声が響いた。  
みなが口々に名を呼ぶが、クラウドは剣をしまうと再び歩き出した。  
その時、クラウドに一番近かったフリオニールが目を見開いた。

「クラウド、お前……」

フリオニールの微かな声は他のみなの声に掻き消された。

動かない体をここまで恨んだことがなかった。自分の無力さで仲間を守る事が出来ずに、あまつさえ、敵にやすやすと連れて行かれてしまう。

誰もが去っていくクラウドの背を、ただ見つめるしかなかった。

「よく来たな」

五人の元へと来たクラウドを迎えるガーランドの言葉に、クラウドは微かに口元を歪ませる。

「さて、お前には共に仲間の元へと向かってもらおう。無論、我らのな…」

皇帝の言葉は光の戦士たちの元にも届いており、彼らは齒噛みした。

「よかつたんじゃないの？これでお前のだ〜いじな仲間とコスモスは救われるわけだし？まあ、僕ちんがみんな壊してもよかつたんだけどね〜」

耳障りな笑い声を上げるケフカに、クラウドだけでなく皇帝も顔をしかめた。

「ケフカ…」

「ハイハイ。恐ろしいですね〜」

威圧感を含ませたセフィロスの言葉でケフカは笑い声を引っ込めるも、相変わらずその顔には笑みが張りついていた。

「願いはあるか？」

「願い……だと？」

突拍子なガーランドの問いかけにクラウドは訝しげな声を上げ、ガーランドを見上げた。

「こちら側に来るということは、今お主が持つものすべてを失うということ。何かあれば聞いてやらんこともない」

「俺は…」

ガーランドの言葉に瞬巡する。

願いはいくらかあった。ただ、その中でも思いが強かったのが、

「……あいつらを、消すな」

仲間が消されないことと、

「それと、時が戻った時に、あいつらの中から俺の存在とこの取り引きを消してくれれば、それでいい」

自らの消去だった。

受け入れられるかなどわからない、祈りにも等しい残酷なほど優しいその願い。

「あなたの存在と、この取り引きの記憶は願い通り封じておきましょう。今回の時を戻すのは今までと勝手が違うために、神龍が記憶を消してくれませんからね」

アルティミシアの言葉を聞いて軽く息をつく。

「もう一つは…?」

気になっていたのもう一つの事柄。

これが達せられないのであれば、時を戻す意味がない。

「あいつら次第だね。あんまりにもだらしなかったり弱すぎたら、

僕ちんたちが何をせずとも消えちゃうわけだし」

ケフカが横目にクラウドの後ろを見やった。

そこにあるのは九人の苦しげな姿。もう、だいぶ楽になってきたのか、何人かは自らの武器を杖代わりに立ち上がっていた。それでもおそらく、この話は聞こえていないだろう。

その様子がケフカの瞳に映っているのに気付き、クラウドは身を締め付けられる思いがした。見ていられずに思わず視線を反らす。

でも、きつと大丈夫だと信じていた。彼らは肉体的には勿論のこと、心も強い。あのティナも、戦いの始めよりとても強くなっているのだから。

「そろそろ向かうべきではないか？あいつらの視線も鬱陶しくなってきた」

感じる九対の憎々しげな視線は、すべてクラウド以外の五人に向けられている。皇帝はそのことを言っているのだ。

「向かうとするか」

セフィロスの手がクラウドの肩に置かれ、強く握られる。眉をひそめながら軽く視線を上げてセフィロスを見やれば、

「逃げられると困るからな」

相変わらずつつそつと笑うその表情。

「ま、待て！行くな！クラウド！！」

響いてきた声が誰のものかなどわからない。ただ、酷く胸が締め付けられる思いがするだけで。

そんなクラウドの様子に気付いているのかいないのか。鎧を軋ませながらガーランドは振り返った。

「コスモスの戦士たちよ……」

「……ガーランド、貴様、クラウドをどうするつもりだ！」

叫んだのはウォーリアだった。

その瞳にはいつもの何倍も激しい険が響いている。

「この者は自らの意思でここへと来た。お前たちを救うためにここへと来た。恨むなら己の弱さを恨むんだな」

皇帝の言葉がそれぞれの胸に突き刺さる。

「コスモスの戦士たちよ……取り引きは成立した。次に会うのは戻りし時の中だ。……また、会おうではないか」

闇に溶けるように薄くなつていく六人の姿。

その時に待てと、叫んだのは誰だったのか。

消える直前に振り返った悲しげで苦しげなクラウドの、小さく微かに動いた口元。

クラウドの名を呼ぶ仲間たちの声は悲痛だった。

だが、その叫びも虚しく響いただけで、彼らが消えた後には何も残りはしなかった。



青年が望んだのは 自分よりも仲間の救い

光が望んだのは 犠牲ではなく共の消滅

闇の望みは 未だわからず

混沌か…

滅亡か…

救いか…

破壊か…

無か…

支配か…

破滅か…

どれも当たりでどれも外れ  
個々の願いがそれぞれ違い  
それぞれ個別に動き出す

願いを胸に動くのは  
光も闇も みな同じ

神々の戦いとは違う思惑が入り乱れる

…



## 第二幕 残ったモノと消えたモノ

どこで失敗したのかなど 誰にもわからない  
今が眞実  
今が眞実

戻るといふ時は  
調和の大切な仲間と引き換えに  
時を戻すは  
調和の一人が仲間に加わるのと引き換えに

片や望まず 片や望んで  
その取り引きは  
一人の青年の存在によって  
成立した

悲しみと苦しみが入り混じり  
その中で蘇るであろう調和の神  
神は一体 何を思うのか  
何を感じ

何を願う

何を抛り所とするのか

いつかどこかで 交わるだろう時

分かれたれた二つの道程<sup>みち</sup>

巡り合うその日

それは思いの外すぐ近くで

再開は

終わりと始まりを共に告げる

荒野のただ中、多くの者がうなだれていた。

ずっと共に戦ってきた仲間。

その仲間が一人いなくなった。

近いが、とても遠い場所へと居場所を変えてしまった。

彼らを救うために、助けるために、消さないために。

その事実が彼らを苦しめていた。

犠牲になどしたくなかったからだ。

十人から九人に減ってしまった光の戦士たちは、自分の無力さを呪っていた。

何が力だ。

何が正義だ。

何が世界を救うだ、守るだ。

仲間の一人も守れずにそんなことが出来るはずがないと。

世界が救えても、守れても、例え一人でも仲間が欠けたら意味がな

いのだと。

ずっと脳裏でぐるぐる渦巻いていた。

「ねえ……」

不意に聞こえてきた言葉は小さく、そして重かった。でもはっきりとしたその声にみなは集中が向く。

「誰か、見た？最後にクラウドが振り返った時、凄く小さくて微妙だったけど、口が動いてたの……」

ティナのその言葉に多くの者が息を呑む中、二人が口を開いた。

「俺、見たよ」

「俺も見た」

ジタンとバツツの二人だった。

「彼は何と言っていたんだ？」

「私にはそこまでわからなかった。声に出してなかったみたいだから、何も聞こえなくて……」

ウォーリアの問いかけにティナはすまなそうに俯く。

「ティナは悪くないよ。むしろ気付いてくれてよかった。クラウドからの大切な言葉だろうからね」

セシルの言葉にティナがおずおすと顔を上げると、彼はどこか寂しそうに、でも優しく微笑んでいた。

そんなセシルの様子にティナは息をホッと吐く。

「バツツとジタンにはわかったのか？」

スコールが見れば二人は力強く頷いた。

「何とやっていたんだ？」

再度スコールが問うと、二人は一度顔を見合わせ、悲しそうな表情で同時に口を開いた。

『“さようなら”…って』

二人の口から放たれたのは、クラウドからの決別と取れる言葉だった。

「そんな…！じゃあ、もう戻ってくる気がないってこと？」

オニオンナイトが悲痛な声をあげる。

「そう…かもしれないっすね。クラウド、あんな様子じゃ本当に戻って来ないかも。それに、あの性格じゃあ取り引きが成立したってわかったらもしかすると……」

ティーダはそこで言葉を切った。次の言葉を言うことが出来なかった。言えばそれが現実になってしまいそう。

でも、その続きを言わなくともみなわかっていた。ティードが続けなくなかった言わなかった言葉。

クラウドが死を選ぶかもしれないという言葉。

「仲間を守れなくて、何が世界を救うだよ…！」

渦巻いていた言葉がポツリと零れ落ちる。

そんなティードの肩を、セシルが言葉なく軽く叩いた。

「クラウド、な。泣いてたんだ…」

ずっと言葉を発しなかったフリオニール。

自分たちに礼を言い去る直前の、あのクラウドがどうしても脳裏から離れない。

みなは、フリオニールの言葉に驚くと弾かれたように顔を上げた。

「いや、泣いていたのとは少し違うかもしれないな」

言い直すフリオニールは俯いたままで、その表情を伺い知ることには出来ない。フリオニールに視線が集中しているが、本人が果たして気付いているのかどうか。それさえもわからなかった。

「フリオニール、お前、一体何を見たんだよ」

バツツの問いにも顔を上げることなく、フリオニールは静かに答え

る。

「見たんだ。剣を拾った後に俺たちに礼を言って去る直前、クラウドの左頬を一筋、たった一筋だけ、涙が伝うのを……」

その内容に一同は言葉を無くした。

どんな時でも冷静沈着で中々感情を表に現さない。でも仲間思いで、的確な言葉で導いてくれる、大切な仲間。

それが彼らのクラウドに対する印象。しかし、今回のことでその印象はことごとく覆された。

一体何を見てきたのだろう。

あれほど脆い彼を見たことが無かった。血を吐くような叫びを、苦しげな表情を、何かの恐怖に固まった瞳を、激情を孕んだ彼を、あれほど怒った彼を見たことも聞いたことも無かった。

「昔、何かあったんだろうね。どこか僕らと一線引いてたし。ティナを助けに行った時もそうだったかな。一緒に戦ったんだ。でも、その時は凄く戦いやすかったんだよ。助言もくれて、無事に勝てたし」

「クラウド、本当に凄く優しいの。オニオンナイトがいなくなった後に私、戦い続きで力が抑えきれなくなって……。でも、その時に私の力を抑えるために戦ってくれた」

オニオンナイトとティナが思い起こすのは旅をしていた時に共に戦ったクラウドの姿。

旅をしたのはすべての時を合わせればみな長くなる。

その時間はかけがえのないもので、誰が欠けても意味がないのだ。

「クラウド…」

ポツリと呟いたのは誰か。

行き場のない、ただ発されただけの切ない呼び掛けに答える声は勿論なく、宙へと消えていった。

「ここで、いつまでもじっとしているつもりか？」

しばらくの沈黙を破ったのはスコールだった。みなを見回し語り掛ける。

「このまま、あいつを犠牲にするのか？」

「でも、僕らはもう…。それに、場所もわからない」

スコールの言葉に息を呑みつつも、セシルは浮かない表情のまま首を横に振る。

「いや、彼の言うとおりだ。我々の時はおそらく止まっている。誰が消える気配も今まで無かった」

ウオーリアの言葉にスコールを除く全員が顔を上げた。

自分の手を見る者、回りの仲間を見る者、互いに顔を見合わず者。様々だったが、彼らの表情は一転した。

「カオスを倒すような時間はないかもしれないけど、きっとクラウドを捜し出して助けるだけの時間はある！」

ティードが立ち上がると、ジタンとバツツも続いた。

「俺には帰るべき場所がある。クラウドにもきつと、帰るべき場所がある！」

「ああ、諦めたらそれで終わりだもんな！忘れるとこだったよ」

三人に後押しされるように続々と立ち上がる戦士たち。

「探しに行こう。きつと、クリスタルが導いてくれる。願えば、望めば答えてくれるはずだ！」

オニオンナイトがクリスタルを掲げた。

「コスモスの残してくれた力。どうか仲間の……クラウドの居場所を示してくれ」

フリオニールもクリスタルを同様に掲げる。みなもクリスタルを掲げ、祈る。

クラウドを捜し出して助けたいと、それだけを祈る。

その時だった。

全てのクリスタルが共鳴するように瞬き、それぞれから伸びた光が一つにまとまる。その光は、ある一つの方向を指し示した。

「あの先に、クラウドが……」

セシルが拳を握り締めて呟いた。

「彼を犠牲になどしてはいけない。行こう」

ウォーリアの声にそれぞれが返事を返す。

一度みなで頷くと、光の指し示す方向へと駆け出した。仲間を犠牲になどさせないために。

地に足が着いた感覚がして閉じていた目を開ければ、そこは朽ち果てた神殿の中だった。見覚えのあるその場所は、クリスタルを集める旅の最中に訪れたことのある場所。

ガーランドの敵かな声が地に響く。

クラウドが見渡してみると、そこにはカオス陣全員が揃っていた。流石にカオス本人はいない。

いつの間にもやらセフィロスの手も肩から離されていた。ここまで来たら、もう逃げはしないと思ったのだろう。

実際、逃げるつもりなどなかった。



「後は、時を戻すのみじゃな」

ふわりと宙に浮かぶ暗黒の雲がガーランド、皇帝、ケフカ、セフィロス、アルティミシアを順に見た。そして最後に、クラウドへと視線を向ける。

「この者のことはセフィロス、お主がどうとでもするのだろう？」

「当たり前だ。これは、私の人形へと戻ったのだからな」

クククツとセフィロスは笑う。

二人の間で交わされる言葉に、クラウドは静かに目を伏せた。

「それで？これから時を戻すんだろう、アルティミシア。こんなにのんびりしていいのかい？時間、かかるんだろう？」

クジャの言葉にアルティミシアは頷いた。

「少し時間がかかります。神龍との共鳴を深く、強くしなければなりませんから。それに……」

一度、アルティミシアは言葉を切ると俯き加減のクラウドを見、クジャへと視線を戻す。

「彼の望み通り、光の戦士たちの記憶も封じなければなりませんか

らね」

「記憶…ね」

そう呟いたのは、目を閉じて腕を組み、折れた柱に背を預けていたジエクトだった。

目を開き、クラウドを真剣な表情でじつと見る。

「お前はそれでいいかもしれねえが、光のあいっらはどうなる？納得するとも思っつか？」

「………忘れたら同じだろう」

クラウドの発した言葉に、ジエクトは眉をひそめた。悟られまいとして感情全てを押し殺したその声に、ジエクトが微かに感じ取られる悲しみに気付いたのだ。

しかし、クラウドはジエクトのその様子には気付かない。彼を見ていないのだから当たり前だ。ただ、クラウドが深く自らの感情に囚われていたことも当てはまるだろう。

忘れたら同じ。

忘れたら同じなのだ。

忘れて、記憶からなくなれば、その者の存在はなかったこととされる。消却され、元からいなかったものとされる。

かつての自分がそうだったように、忘れてしまえば同じなのだ。

彼の脳裏によみがえるのは、過去、自らを庇って死んだ親友を模倣し、なりきっていた自分だった。

忘れたら同じというのは、身をもって体験していた。

唇を強く噛めば、口の中に広がる鉄の味。

そのクラウドの様子に気付いたのは、ずっと彼を見ていたジエクト、そしてゴルベージだけだった。

「一度解散だ。アルティミシア、頼んだぞ」

「わかっています、ガーランド」

姿を消すガーランドとアルティミシア。

「僕ちゃんも部屋に戻ろっかな」

ケフカはそう言いながら奥へと消えた。暗黒の雲、エクステス、クジヤも奥へと消えていく。

「では、私も休むとするか」

皇帝は一度、セフィロスへ意味深な視線を向けると姿を消した。そんな皇帝に対してか、セフィロスは鼻で笑う。

「クラウド、付いてこい。お前の部屋へ連れて行ってやる」

クラウドに向かってそう言うとセフィロスは歩きだした。クラウドは何も答えず、無表情のままセフィロスの後に付いて行く。

その場に残されたのは、ゴルベージとジエクトの二人のみだった。

「さて、そろそろ俺様も動くとするか」

一体どこへ動くというのか。

この場合、部屋へ戻るということだろうか。

「待て、ジエクト」

「あん？」

「何も見ていないわけではないだろうか？」

「……………」

止めたゴルベーザから放たれた言葉にジエクトは軽く目を見張る。しかし、背を向けられているゴルベーザにはそんなジエクトの表情の変化はわからない。

表情を戻し、ジエクトはゴルベーザへと向き直った。

「お前は見たのか？あいつの、クラウドの悲しいような苦しいような……………そんなあの表情を」

言葉なくゴルベーザは頷いた。

「まったく、ガキのくせにこんな選択しやがって。背負おうとしすぎだな。もちつとガキらしくならないかねえ」

「……………すでに何かを背負ってもいるようだしな」

「ああ、見てりゃわかる。少なくともセフィロス関連だな。いいことじゃないだろう」

二人が指摘するのは先程のクラウドの様子。

何かを堪えるような表情をしていた彼は、見ているこちらが辛かった。しかしそれも一瞬で、直後には何もなかったかのように無表情へとなっていた。

それは明らかに自分の感情を押さえ込む仕草。

「俺は行くぜ。ちょっと寄りたい場所があるんでな」

背を向け、手をヒラヒラさせながら去るジェットを、ゴルベージも今度は止めはしなかった。



神殿のある一室。シンプルなその部屋の中、クラウドは一人ソファに座っていた。

セフィロスに連れてこられたこの部屋が、今よりクラウドの住むべき、居るべき場所。

嘆息してソファの背もたれに体を預ければ、軋みをあげながらソファはその重みを受け止める。

目を閉じれば浮かぶみな最後の顔。

今頃、勝手な行動をとった自分を怒っているだろうと自嘲する。

ティナは自分を責めて泣いているかもしれない。そんなティナをオオンナイトが慰めているのだろうかと思いを寄せる。

それが当たろうが外れようがクラウドにはよかった。

これで彼らは消えることはない。コスモスも戻ってくる。時が戻れば自らに関する記憶はすべてアルティミシアによって彼らの中で封じられる。

忘れられることは悲しい。

しかし、このことは彼らの責ではない。苦しまなくていいことだ。

忘れて、後腐れなくこれからを過ごしてくれればいい。例え利他的と言われようと構わない。自ら望んだことなのだから。

ふと左頬に手をやった。

すでに乾いて何も残っていないが、去り際に零れてしまった涙。泣くつもりなど露ほどもなく、そんな自覚もなかった。しかし、一筋でも零れたのは事実。

泣いたと、そう言えるのかもしれない。



「まだ、俺の中に涙が残っていたんだな」

枯れ果てたと思っていたのに……。

そう小さく呟いた言葉は静かな部屋に大きく響いた。

コンコン

ノックされた扉に驚くでも視線をよこすでもなく、返事もしなかった。

「入るぜ」

聞き覚えのあるその声に、微かに強張っていた体の緊張が解けていく。

「何か用か？」

「あんまり警戒されていないように見えるのは俺の気のせいかな？」

後ろ手に扉を閉めながらジェクトはクラウドを見た。

「あんたはティードの父親だろう。それに、あんたからは特に何も感じない。カオス陣独特の空気をな」

「そうか？俺的には結構好き勝手やってる気なんだがな」

ポリポリと頭を掻くジェクトを視界に捕らえつつも、どこかボンヤリとした様子でクラウドは再度問い掛けた。

「もう一度聞く。何の用だ？」

先程よりも少し強めたその口調。

そんなクラウドに苦笑しながらジェクトは近づいた。

ジェクトが近づくのには気付きつつも、クラウドは動くことをしなかった。殺気も何も感じられない相手。どうせ逃げることなど始めから考えてもいない。

「ティードは元気か」

「…ああ、うるさいくらいだ」

どこかジェクト相手に気を許しているところがあつたのかもしれない。か。ティードの父親であるという事実と、本人が気さくな男だというイメージが強かつたのだろうか。

ソファアが沈み、ジェクトが腰掛けたという事実を知らせる。

しばらくの間、二人は言葉を交わさずにそのまま座っていた。流れる空気に緊張感はなく、穏やかなものだった。

クラウドは目を閉じ、その場の心地よさを味わっていた。どれくらい経つた頃か、ジェクトが不意に口を開いた。

「本当にお前はこれでよかったと思ってるのか？」

その言葉に揺れた肩。

その振動はソファアを通してジェクトにも伝わる。

「…他に、道があったとでも？」

「一緒に全員で消えちまう……とかな」

クラウドの問いに、ジェクトなりに真剣に答えていた。

「望んでねえだろ。お前も、光のあいつらも」

その言葉に閉じていた目をゆっくりと開き、始めてジェクトを見た。

「それが許されなかった、と言えはいいか？」

「ん？」

ジェクトは意味がわからないと言いたげにクラウドを見返した。そして息を呑む。そこにあったのは見るのが苦しくなるような悲しさを湛えた瞳。

「アルティミシア……」

「！そうか……あの魔女か」

その名だけで何があったのか察したのだろう。ジェクトは渋面のまま呟いた。

「あいつらの考えそうなことだ。タチが悪いぜ」

大きく舌打ちするジェクトを見ながら、クラウドはやはりカオス陣は一枚岩ではないと確信した。

そしてふと思う。

「あんたはやっぱり他の奴らとは違う」

「そんなに違うか？」

「ああ、違う」

即答したクラウドを意外そうにジェクトは見た。

「始めは、ティーダの父親だからだと思っていたんだが…それだけじゃない。あんたの中に、どこか眩しさを感じる。コスモスやウォーリアとまではいかなくとも…光みたいなき眩しさがある」

そう言うクラウドはどこか眩しそうに目を細めていた。ジェクトは軽く目を見開くと、次の瞬間にフツと微笑んでいた。

そしてクラウドの頭をいきなりガシガシと撫で回し始める。

「な、何するんだ！」

抵抗しようとして手を伸ばせば、そのままジェクトの手は止まった。

「？」

訝しげにジェクトを見やれば、そこにあるのは息子のティーダには滅多見せない父親の顔。父親のことをあまり覚えていないクラウドには、そんなジェクトが温かく感じられて。

「お前はどっかウチのバカ息子と似てるな」

「俺はティーダみたいに明るくはない」

少し不機嫌な声のクラウドにジェクトは微笑んだまま言った。

「そういう意味じゃねえ。どこか察しが良くせに本音を隠すとか、強がるとか、後全部抱え込みまうとかな。そういうところが似てるんだ」

ジェクトが頭に乗せていた手をどければ、温もりが離れていくその感覚にクラウドはなぜか一抹の寂しさを感じた。

先程よりも元気をなくしたように見えるクラウドの髪。クシャクシヤになったその髪に指を通し、梳いて直していくクラウド。

「結構クシャクシヤになっちまったな」

そう言いながらジェクトはクラウドから視線を外し、目を閉じてソファーにもたれかかった。

ソファーは軋み、大きく沈み込む。

「……俺は昔、コスモス側の戦士だったらしい」

「!?!? あんたが?」

驚きに目を見開き、クラウドは思わず身を乗り出した。

「ああ。俺もこの間皇帝の奴に聞かされたばかりなんだがよ。どうやら俺はいいように使われたらしい。闇のクリスタル……とやらを作るのにな」

「闇の、クリスタル?」

「何なのかは知らねえが、ろくな物じゃねえだろう。お前がこっちに連れてこられた理由も、そこにあると考えると考えていいだろうな」

思わぬジエクトの話の内容にクラウドは啞然としていた。その顔は驚愕に彩られ、言葉も失ってしまったている。

「俺自身、コスモス側にいたころの記憶なんてねえが、それを上手く突かれた。過去のことはどうしようもならねえが、お前には知る権利があるからな。話しておきたかったんだ」

目を開けたジエクトの視界に映るのは灰色の天井。

「相変わらず変わりもしねえ、きな臭せえ天井だ」

呟いた声には様々な感情が入り混じっており、クラウドには話しかけることが出来なかった。

そんなクラウドの様子を視界の端に納めながらジエクトは思っただ。

支えたいと。

自分の息子に素直に接せられずに溝を作った。構ってやれずに色々抱えさせてしまった。ある意味償いなのかもしれない。クラウドにティーダを重ねているからなのかもしれない。しかし、ジエクトはそれでもよかった。支えたいと思ったのは自分の意志だからだ。

「さて、長いこと邪魔したな」  
「いや…」

ジエクトは立ち上がると扉へと向かった。

「色々気いつけるや。な、クラウド」

振り返ってニヤツと笑い、ジェクトは去った。

「あいつ…」

何がしたかったんだ？

ポツリと呟くも、胸が少し軽くなっているのを感じ、フツと笑顔を浮かべた。

走る戦士は止まらない  
調和も混沌も止まることはしない  
歩みを止めればすべてはそこで終わると知るからだ

願いを持つて人は動く  
人ならざる者も願いを持つて動く  
それを知るからこそ万物は願いを持つ

叶えられるかなどわからぬ願い  
それでも持つ願いは大切だから

生きる希望な時がある  
生きる意味そのものな時がある  
生涯を通して見つけることもある  
持つことに意味があることもある

今調和の戦士が持つ願いは強く  
しかし青年が持つ願いが  
混沌の戦士が持つ願いが上をいく  
叶わぬ願いは塵と化し  
記憶の奥底へと沈みゆく

違えられた道が戻る日は来るのか  
それは誰にも  
神にさえ わからぬこと

### 第三幕 別れのコトバ

大切だから守りたいと思った

(大切じゃないならそう思わない)

誰かを犠牲にしてまで助かりたいと思わなかった

(だってそれはとても悲しいことだから)

どんなことをしてでも叶えたい各々(おのおの)の願いがある

(例え何を言われようと今更何も覆らない)

誰かにとつての願いは

誰かにとつて残酷で

それに気付かず時は進む

知られることのないそれは互いを蝕み

やがてくる別れはすべてを忘却させる

忘れゆくはこたびの戦い

忘れゆくは仲間の青年  
最後の時は無情にも訪れ  
引き裂くことを与える

闇は朝い  
光は悲しみ  
青年は憂う

神々の戦いは終わらずに続く  
別の最後を求めて時は戻る

すべてを差し置き  
動き始めるは混沌の戦士の思惑のみか

ウォーリア・オブ・ライトは先頭を走り続けていた。

誰も泣きごとを言わずに彼の後ろに続いて走っている。もたもたしている暇など一切ない。こうしている間にも、混沌の者たちは時を戻すために動いているだろう。早くしなければ、クラウドを助ける時間がなくなってしまうことは明白だった。

時間が巻き戻されると自分たちがどうなってしまっのか、ウォーリアたち光の戦士にはまったく見当がつかない。

ウォーリアは肩こしに軽く後ろを振り返った。

走ることこそ止めはしないが、誰かがきつそうであれば歩きへと変えるつもりだった。そして案の定、疲れの色が見えてきている者が何人かいる。

「みんな、少し歩こう」

その声をかければ多くの者の表情が柔らかくなった。疲労を隠していたのがよくわかる。進むペースは遅くなったものの、心無しか歩きにしては少し速かった。

クリスタルの光が指し示す場所へはまだ少し距離があるが、それも後少し。ここまで来ればもうカオス陣がどこにいるのかわかる。

“過去のカオス神殿”

ウォーリアとガーランドの因縁の場所。そこにいとわかっていた。恐らくそこが、カオス陣営の本拠地。

「絶対に助けるんだ。クラウドを犠牲に…いや、あいつらに渡したりするもんか」

バツツの言葉は自分に言い聞かせる静かなものだった。決して誰かの返事を期待しての言葉ではない。しかし、あちこちから返ってくる勢いのある言葉。

「きつと大丈夫。時間を戻すなんて大それたことがすぐに出来るわけがない。僕達にはまだ時間が残されている」

「セシルの言う通り。助けだして、十人に戻って、それから消えるしか道がないなら消えればいい。そりゃあ消えるなんて嫌だけど、誰か一人欠けるより俺はました！」

「私もジタンに賛成。欠けるくらいならみんな揃って一緒に消えて…最期の最期まで、みんなといたい」

セシル、ジタン、ティナの思いの籠もった強い言葉はバツツの言葉を補強した。

助けたいのではなく、そこにあるのは助けるといふ強固な意志。仲間を一人でも失いたくないと願う強い思い。

思いのために、仲間のために動く彼らは止まりはしない。しかし、そんな彼らを遮るように突如行く手が爆発した。

「何だ!？」

「これ、魔法の感じ…!」

フリオニールの叫びにティナの言葉が返ってくる。

「俺たちの足止めにカオス側の誰かが来たのか！」

フリオニールの怒りの声に、全員がそれぞれ武器を構えた。巻き上がる粉塵で何も見えず、おさまるまで身動きがとれないと考えをみなが巡らせていた。

その時だった。

粉塵を突き破るように飛んできた二つの黒い球。

完全に不意打ちだったそれを、フリオニールとティーダがもろに受けてしまう。

「フリオニール！ティーダ！」

スコールが珍しく声を荒げた。彼もクラウド同様に普段こそ冷静沈着だが、仲間が目の前で襲われてまで平静を装うことは出来なかった。

「あれは…！」

一瞬粉塵の奥に見えたそれ。

オニオンナイトはその特徴を覚えようと目を凝らした。

「ッ！」

ドサリと、何かが倒れるような音がその場に響く。ティーダは倒れ、フリオニールは膝をついて体を支えていた。二人を包むようにしていた黒い球は徐々に小さくなり、まるで二人の中へ吸い込まれるようにして消えた。

「二人とも、大丈夫か？」

先ほどまでであった正体不明の球が消えたため、ジタンは二人の元へと素早く駆けていく。

「んー、何かフラフラするっす…」

体を起こしたティードは頭を振ってジタンを見返した。

「フリオニール、立てるか？」

「ちよつと、微妙だな」

ふらつくのはフリオニールも同じようでスコールの手を借りていた。苦笑しながらすまないと言いつて、彼の手を借りて立ち上がる。フリオニールはふらつきながらも何とか自分の足で立っていた。

「ティード、君は立てるか？」

「手、かして？」

すまなそうにセシルに頼めば、ティードの頼みを快く引き受け、立ち上がることに手をかした。

「大丈夫？」

「ちよつとふらつくけど大丈夫っす！」

ティードの元気よさにセシルとジタン、そしてみなが安堵する。一部の者を除いて。

「一体何だったんだろうな」

バツツがようやく晴れた粉塵の向こうを見るも、すでに何の姿形もない。あれだけの時間があって姿の見える場所いたらそれはかなりの馬鹿だろう。

そんなことを思っていると、バツツは一人首を傾げているオニオンナイトを見つけた。

「どうしたんだ？そんなに首傾げて」

「あ、バツツ」

肩に手を置かれ始めて隣にバツツが立っていたことに気付くオニオンナイト。彼にしては珍しい。それほど考え込んでいたということだろう。

オニオンナイトは首を傾げたままバツツを見上げた。

「さっき粉塵の奥から赤い布みたいなものが見えたんだ。でも、それが何なのかはわからなくて。見覚えはあるんだけどなあ」

悩むオニオンナイトは再び記憶を探り始める。あいつでもない、あの人でもないとぶつぶつ呟いているため、理由を知らない人が見ると少し恐ろしい光景だ。

「そつだ。ティナやウォーリアは何もみなかったのか？」

バッツは二人を振り返った。

「…どうかしたのか？」

しかし、振り返れば険しい顔をしてフリオニールとティーダを見る二人が目に映る。

「何だか、ざわざわするの」

「嫌な感じがする。あの二人…何か違和感がある。どうしても私はそれを拭えない」

ティナとウォーリアの真剣さなバッツは眉を寄せた。様々なことに敏感で、仲間を信頼する二人だからこそこんなことを言うのは珍しく、聞き逃せない。

バッツはフリオニールとティーダの二人をしてみるも、いつも通りの二人にしか見えなかった。

「俺にはいつもの二人にしか見えないけどな…」

そう呟くも、このままでは埒があかないと大きく柏手を何度か鳴らした。未だ険しい顔をする二人をチラッと見て、他の仲間たちへと視線を移した。

「注目！ちゅーもく！！このままゆっくりしてたら時間が来ちまう。急がないとクラウドを助けられなくなるぜ！」

バツの叫びにハツと彼らは我に返った。

「そつだ、クラウド助けに急がねえと！」

ジタンは隣にいるティータを見上げた。

「ティータ、ふらつくかもしれないけどがんばってくれよ！クラウド助けた後ならきつとたっぷり休めるぜ」

そう励ますと、ティータはきょとんとしてこつ言った。

「クラウドって、誰っすか？」

思わぬ言葉に一同は啞然とした。  
しかし、驚きはまだ続く。

「俺も気になっただけけど、誰なんだ？クラウドって」

フリオニールまでさも不思議そうに言いだし、隣に立っていたスコールは思わずフリオニールを凝視した。

「何だ、スコール。俺の顔に何か付いてるか？」

「…お前、本気で言っているのか？」

「何を」

「クラウドが誰かって」  
「嘘言ってるどうするんだ」

フリオニールの瞳には嘘も冗談も見受けられない。スコールと同じようにティータを見ていたセシルも嘆息した。

「さっきの影響？っていうか、これが狙いだっただってこと？」

セシルの呟きにジタンは愕然とした。

フリオニールとティータは意味がわからないと言いたげに顔を見合わせている。

「ざわざわしてる。二人は本当に二人？」

「ティナ？」

突然のティナの言葉にオニオンナイトが彼女を振り返った。

「ティナ、何言ってるのさ。確かに言ってることは滅茶苦茶だけど、二人は二人でしょ？」

「いや、ティナに私も賛成だ」

「ウォーリア……」

ウォーリアまでもが賛同し、オニオンナイトはどうしようかと視線を巡らせた。

「どうしたんだよ、ウォーリアもティナも。今は取り敢えず二人にクラウドのことを思い出させないとやべえって」

「そうそう。じゃないと本当に間に合わなくなる！」

バツとジタンの急かす言葉に答えず、ウォーリアはフリオニール

に近寄った。スコールは一步下がり、何も言わずに場所を空ける。

「……」

じつとフリオニールの瞳を見つめるウォーリアは真剣そのもので、その迫力にフリオニールは弱冠押され気味だった。

少ししてウォーリアは次にティーダにも同じことをした。

「な、何すか？」

ティーダがおそろおそろの問い掛けてみるも、ウォーリアは何も言わない。

しばらくして、ようやくポツリと彼は言った。

「光がない」

「はい？」

「え？」

フリオニールとティーダは同時にすつとんきょうな声を上げた。

「ウォーリア、それは一体どういう意味なの？」

わかるように説明して、とオニオンが言外に訴える。

「目に光がない。二人ともだ」

「……俺、そんなに力無い目してたのか」

ティーダはなにやら意味を取り違えてへこんでしまったが、セシルにそれは違つと指摘された。

「ウォーリア、説明を求めろ」

オニオンに続いて説明を求めるスコールの静かな声が飛んだ。それはみんなの思うことで、自然と視線がウォーリアへと集まった。彼は一つ頷くと、ぐるりと仲間たちを見回し口を開いた。

「そうだな。コスモスの戦士である我々の中には必ず光がある。だからこそ、よほどのことがない限り完全に闇に染まったり、墮ちることはない。そしてその光とは、自分がコスモスの戦士であるという明確な意志の元にある」

「もちろん他の、自分の強固な意志からの時もあると思う。でも、二人からはそれが無いの。今までであったのに、感じられないの」

ウォーリアに続けてティナも説明に加わった。

「ってことは、フリオニールとティーダからその意志がなくなったっていうこと？」

セシルが驚きに言葉を溢せば、ある者は愕然とし、ある者は顔を歪め、ある者はフリオニールとティーダを見やった。

ウォーリアとティナの説明を受けても尚キョトンとしている二人。いや、むしろ話についてこれていないようだ。

「俺には戦う意志だとかあるぞ？」

「俺にだってあるっすよ」

フリオニールとティーダは表情を変えずに仲間たちの顔を見渡した。

「……まどろっこしいのは嫌いだ。はっきり言おう。」

「お前は誰だ？」

「!?!」

その場の空気がウォーリアの驚愕の一言でガラリと変わった。

「何言ってるんだよ、ウォーリア。二人は二人だろ？」

ジタンが動揺しながら言うも、ウォーリアの目にいつの間にもやら宿っていた敵意は消えない。

「ウォーリアは、フリオニールとティータに聞いてるんじゃないよ」

ティナは胸の前で合わせていた手をほどきながら、少しづつ、まるで誰かに気取られないように魔力を練りだす。

「ウォーリアが聞いてる相手は、二人を操ってる奴……」  
「操る？」

スコールが眉間にしわを寄せながら訝しげに、おうむ返しに繰り返した。

「私には誰かなのかまではわからないが、二人を見ていると違和感が沸くのだ。いつもとは違う雰囲気」

フリオニールとティータは黙ってウォーリアの話を聞いている。い

や、他のティナ以外のメンバーもそうだ。

「私は…わかった。今わかったよ。一度、私も同じようにされたことがあるから。二人から感じるこの魔力……出て来なさい、ケフカ  
！！」

ティナが叫ぶと同時に、練り上げた魔力で作り上げたホーリーを500mほど離れた場所にある岩影へとぶつけた。その途端にフリオニールとティエダから表情が抜け落ち、同時に飄々とした声が砂煙の奥から響いてくる。

「ばれちゃくしょうがないな」

九人の行く手を阻むようにして現われたケフカ。しかし、そこにはケフカだけではなくもう一人の姿もあった。

「お前もいたのか！」

声を荒げたオニオン。

ティナがケフカの名を呼んだ際に剣呑としていた瞳が更に険しさを増す。

「そうか…さっき粉塵の向こうに見えた赤い布はケフカのマント…  
…」

続いて小さな声で呟かれたその声は、誰の耳にも届かなかった。

「お前ら、二人に何をした！」

ジタンは今にも突っ掛かっていきそうな勢いだ。必死に自制しているのがよくわかる。

「そうそう、勢いに任せて突っ込んで来ない方がいいよ？僕ちんたちに壊されちゃうからねえ」

ケラケラと笑うケフカは戦士たちを見回した。

「あゝら嫌だ。そんな険しい顔しないでよ。ちょっと操らせてもらっただけだつて。今来られるとホント迷惑だから、僕ちんたちで足止め！困るんだよね、邪魔されると。でも死なれるとそれもまた困るから、時間が来るまで遊んであげようと思つてね。僕ちん優しい！」

自分自身を誉めながら笑うケフカに、光の戦士たちは怒りをたぎらせていく。目の前で飄々としているくせに隙がなく、むやみに戦えないこの相手には油断は禁物なのだ。

「あの二人がこっちに来た金髪クンのことを忘れてらしばらく時間潰し出来ると思つたのに、ぜゝんぜん上手くいかない。何で？どうして？僕ちんの策は完璧だつたはずなのに！」

笑っていたかと思えば突然怒りだすケフカは、良い意味でいえば感情豊かだ。しかし、ここにいる全員が知っている。ケフカがここまですで感情がコロコロ変わるの、彼が壊れてしまっているからだということを。

「我らが今行つていいる時間を戻す術はとて<sup>すべ</sup>もデリケートだ。そう簡単に止めることも邪魔をすることも出来はしないが、それでもお前たちは邪魔だ。危険分子は他の場所で待機していてもらわなくてはな。好き勝手に動かれては目障りだ」

ケフカは怒りながらもどこか飄々としており掴み所がない。そんなケフカと共に現われた暗闇の雲は不思議な威圧感を見せている。

「好き勝手動いているのはお前たちの方だ！」

バツツはケフカと暗闇の雲を指しながら怒気の孕んだ声で叫ぶ。

「何もかも勝手に始めたのはお前たち混沌の軍勢だ。そちらの邪魔立てこそ、我々は許さない！」

手にしていた剣を構え、ウォーリアは二人を睨み付ける。

「うるさいなあーもう。死なない程度に痛め付けてやる」

「ケフカ、あの二人を使ってやれ」

「ああ、そっか。そういう手があった。楽しい、楽しい、鬼ごっこ！仲間同士で共倒れにならないようにせいぜい頑張ればいいよ」

暗闇の雲に素直に頷くと、ケフカは指を鳴らした。するとどういふことか、表情をなくしたままフリオニールとティードはそれぞれ戦いの構えをとる。

「君は二人にも戦わせるつもりなのか！」

「当たり前！使えるモノはすべて使うのが、戦いにおいての鉄則でしょ、優男クン？」

「絶対に、許さない……！！」

セシルはパラディンだった風貌を一瞬にして暗黒騎士へと変える。他の光の戦士たちも怒りが収まり切らない様子だ。

「戦いを、始めるか」

彼らの戦いは、暗闇の雲の言葉によって火蓋がきって落とされた。

目を開けて視界に入った見慣れない灰色の天井に、今自分がどこにいるのか一瞬わからなかった。しかし、頭が覚めてくるに従って思い起こされる現状。

「そうか……ここは“過去のカオス神殿”だったな」

前に一度、ウォーリアとガーランドの因縁の場所だと聞いたことがある。あの時、微かに歪んだウォーリアの表情を今でも覚えている。時間という概念が存在しないこの世界には、朝昼夜というものが個々の世界にはない。世界と世界を繋ぐ道は辛うじてわかるものの、個々の世界は昼なら昼、夜なら夜と、時間の経過がまったくない。

「俺はどれくらい眠ってたんだ？」

頭はスッキリとしているが、そんなに時間は経っていないと思った。二時間経っているかいらないか。その程度だろうと見当をつける。

「いくら自分の意志でここへ来たとはいえ、気を抜きすぎだな」

自身に呆れたため息まで出てくる始末だ。

時間が戻ったようには感じられないため、まだアルティミシアが準備とやらを行っているのである。

それにしても、どうやらクラウドには誰の見張りも付いていないようだ。無用心でないかと思う。それともそう思わせるのがカオス側の狙いなのか。クラウドはセフィロスが見張りのために共通の部屋

になるかと思っていたのだが、その見当は既に外れている。  
彼はこの部屋に連れてこられた時、セフィロスに問うていたのだ。

『あなた…同じ部屋じゃないのか？』

『何だ、私と共通の部屋が望みか？』

『違う。普通見張りくらいつけるだろう』

『……お前は逃げない』

『！！』

『私を甘く見るな。お前の考えなどお見通しだ』

セフィロスにはバレていたのだ。

クラウドにまったく逃げる意志がないことが。

それに恐らく、もしもクラウドが逃げ出して仲間たちの所へ戻ろうとした時の対策も既に練られているはずだ。

クラウドが仲間たちの元へ戻ろうとしたその瞬間に、きっと彼らは消えるだろう。彼らの時間はまだ、アルティミシアの手の内にあるのだから。

ただ、皇帝の罠くらいは扉の向こう側にあるかもしれないと危惧した。しかし、その可能性は無いに等しい。セフィロスが必要ないと、皇帝に言っているだろうことは予測される。恐らく、他の全員にも。



クラウドはソファァーから立ち上がると扉の前に立ち、少しだけ開けた。廊下へ顔を覗かせてみるも、やはり誰の気配も近くに感じられない。本当に近くに誰もいないのだ。外に出ているのか、元々誰もいないのかはわからないが。自分でも理由のわからないため息を吐いた時だった。

ドオオオオオン!!!

「!!!」

聞き慣れた轟音が耳をついた。

反射的に体は動き、クラウドは先ほどまでいたこの神殿の中心と言える玉座のある場へと走りだす。

轟音はあの部屋の天井が何らかの衝撃で崩れた音だ。おまけに音が聞こえてくるまで感じなかった、体が痛くなるほどの激しい殺気。そして感じる大勢の気配。

それは感じ慣れた、温かく優しい光と調和の気配で、知らず知らずクラウドの表情は苦しみに歪む。

「どうして……どうして来たんだ……!!!」

そんなこと、誰にも聞かずとも答えは火を見るより明らかだった。彼らはそういう人間だ。どんな理由があろうとも、仲間を見捨てない。欠けることを許さない。犠牲など、絶対に許さない。クラウドは勢い良くその部屋へと繋がる扉を開け放った。天井だった瓦礫と、まだ少し舞っている粉塵。その中へ駆け込んだクラウドへ、中にいた者たちの視線が集中する。クラウドはその場の光景に絶句し、棒立ちになった。

「クラウド…見つけた!」

「ほぐら、お前らが天井落とすからみんな来ちゃった」

「ケフカ、暗闇の雲……」

ぎこちない様子でクラウドはケフカと暗闇の雲を見やった。少しポロボロになっっているものの、仲間たちほどではない。再び仲間たちの様子を見れば、フリオニールとティード以外、全員膝について荒い息を吐いている。なぜかボンヤリと虚ろな様子のフリオニールとティードに違和感を覚えながら、それでもクラウドは問わずにはいられなかった。

「っどうして…!」

悲嘆に顔を歪めるクラウドは痛々しく、見ていられない。それでも彼らはクラウドを見て胸を痛めながらも、視線を反らすことはしなかった。こういう顔をさせてしまうことはもとより承知。覚悟の上だった。

「仲間を助けるのに理由があるかい？」

飾られないジタンの言葉。賛同して頷く仲間たち。不覚にも今すぐ駆け寄って泣きだしてしまいたい衝動に駆られる。しかし、それは絶対に許されないこと。今クラウドが走って行ってしまえば、恐らく彼らは消えるだろう。

クラウド一人、残して……。

それはクラウドの願いとはことなる。彼の願いは仲間たちが消されないこと。

「クラウドは返してもらおうぜ！」

バツツの大声にクラウドは浸っていた思考から引き出される。仲間たちへと視線を戻せば、みんな立ち上がり、武器を構えていた。クラウドは止めてくれと叫びたかった。しかし、それは出来ない。自分の意志で、仲間の思いを振り払ってここへと来た。裏切りと言っている行為を取った。それなのに来てくれた仲間たちを止めることなど出来はしなかった。自分たちの探すものを、手にしたいものを、目標とするものを目前にしたとき、人は思いもよらぬ力を発揮することがある。己が一人でないならば尚更だ。

「調和の戦士ども、我らが居城、荒らしてくれたな」

一歩踏み出し、その巨大を揺らして現われたガーランド。その威圧感、彼の持つ風貌と雰囲気、魅せているものだ。

「今更だな、ガーランド。……クラウドを返してもらおうか」

ウォーリアの剣幕は激しく、真っ直ぐであるものの、カオス側の誰もたじろぐような者は存在しない。むしろ、嘲笑っている者がほとんどである。

「滑稽だな」

「何だと？」

「そのままだ、愚か者どもめ」

セフィロスの言葉に訝しげに聞き返したウォーリアを、再びセフィロスが一蹴する。

「お前たちはなぜここへと来た？己の感情だけだろう。コイツの思いを何も汲み取るうとしていない、愚かで一人よがりな行為だ」

セフィロスはウォーリアから視線を外さぬままクラウドの隣に立つと、乱暴にその背を押した。

「？」

仲間たちの方へ押し出される形となったクラウドは、訝しげにセフィロスを振り返る。

「勘違いをするなよ、クラウド。これが本当の最後だ。何もわかっていない愚か者どもに、己の思いをぶつけてやるといい」

うっそうと笑うセフィロスの表情は冷たく、心底光の戦士たちを嘲笑っていることがわかる。クラウドが嫌悪を込めてセフィロスを睨み付ければ、彼はその笑みを深くした。

「ケフカ」

「な〜に？」

暗闇の雲は不意に思い出したようにケフカの名を呼んだ。

「あの二人の洗脳を解いてやれ。兵士の最後の言葉くらい聞かせてやるといい」

「しょーがないですねえ。ま、いつか」

ケフカが指を鳴らすと、先ほどまで虚ろだったフリオニールとティーダの瞳に光が戻ってきた。

「俺は…一体何を？」

「何で俺、剣握ってるんすか？」

我に返った二人は不思議そうに周りを見渡した。ボロボロの仲間と周りを取り囲む敵の存在に混乱しているようだ。しかしその混乱も束の間で、少しすれば自分のしたことを思い出したのか、表情が固いものへと変化する。何かを言おうとしているが、言葉にならないようだ。

「二人とも、正気に戻って良かった」

ティナの心底安心した声に、二人は同時に振り返った。

「ティナ、俺は…」

顔を歪めるフリオニール。ティーダはみんなに合わせる顔がないのか、俯いてしまっている。

「これで揃った。後は…」

スコールは言葉を一旦区切ると、二人から視線をクラウドへと移し替えた。

「ケフカ……あんだ、まさか」

「まあ、きつと君の予想通り。さっき暗闇の雲も言いましたからね」  
悪びれた様子など微塵もないケフカ。実際、彼に罪悪感などないだろう。

「少しくらい足止め可能って思ってたのに、あいつらひっかからな  
いんだもん。僕ちんつまんな〜い」

ケフカのふざけた言葉にクラウドの怒りは沸々と上がっていく。しかし、ケフカに構っているような場合ではないのも事実だ。

「どうしてそんなことをした」

だが、到底押さえられるほど穏やかな感情ではないことも事実。

「だって〜、足止めには一番効果的だもん。僕ちんだって始めは戦  
うつもりなんてなかったし」

「気付かれてしまっっては仕方がないからな。ケフカと共に戦ったま  
でだ。それに、ケフカから聞いた限り、お前が言った二つのことに  
あてはまりはしない」

暗闇の雲の的確な言葉に、クラウドはグッと言葉に詰まる。確かに  
にクラウドが願ったことに仲間を操るな、とは言っていない。そし

てこれはケフカの戦法だ。ここで行われる戦いに正々堂々など求め  
ても無駄だ。

「クラウド」

ケフカたちを睨み付けていたものの、芯の通った力強い声にクラウ  
ドは仲間たちを振り返った。

クラウドを呼んだ声の主は光の戦士を統べる彼だった。

「ウォーリア……」

こうして名を呼ぶようなことなどないだろうと思っていたクラウドだが、酷く呆気なくその思いは砕かれた。

「クラウド、今のは一体どういう意味だ？」

ウォーリアの静かな声に、クラウドの肩が目に見えてビクリと震える。その反応を見逃さなかったウォーリアは目を細めた。

「暗闇の雲が言う二つのこととは、何だ？」

敢えて、今ここで聞かないという選択をすることも出来る。しかし、ウォーリアは聞かなければならない衝動に駆られていた。なぜかはわからないが、聞かないと後悔すると、本能が警鐘を鳴らしている。彼の問いは、出来ることならば、決して聞かれなくなかったこと。交換条件である二つの願いはクラウド個人の願いであり、彼らの思いはジエクトに言われたように無視していて、踏みにじっているのだ。しかし、ごまかしはきかない。無言を貫き通すにも、仲間たちは許してくれないだろう。それに、カオス側の誰が言わないとも限らない。

彼らに教える以外、道は残されているようには見えなかった。

「なあ、クラウド」  
「来るな」

近寄ってくるバツツに拒絶の意を示すも、彼の足は止まらない。動こうにも自分の足は一步引いたらそれ以上は動かず、何も出来ない。頭では動かければいけないと、離れなければならぬと理解している。心は、体はそれを拒絶している。

「来るな！」

「やだ。ほら、捕まえた」

バツツが伸ばしてきた腕を払おうとしたクラウドの腕を逆に取り、満面の笑みを浮かべる彼とは対照的に、クラウドの表情は悲しみに暮れ、その青い瞳は揺らいだ。逃げる事が出来なかった。腕を取られてしまった。

このままでは仲間たちは消えてしまう。ならば、取る行動は一つだけ。

「ウォーリア、話は後でいいだろう？今は行こう！」  
「……そうだな。だが、これからだ」

セシルにしぶしぶ頷きながらも、ウォーリアは油断なく辺りを見回した。正しくは周りにいる混沌の戦士たちを。

バツツもクラウドをその背に庇いながら、掴んだ腕を離さずゆっくりと仲間たちの元へ移動する。

だからなのか、彼らは気付かなかった。

伏せられたクラウドの顔から、表情が消えていることに。

「何で誰も来ないんだろう」

オニオンが不思議そうに首を傾げる。

誰かがこの状況に口出しすることはおろか、戦意さえまともに感じられないとはどういうことか。

セフィロスは言った。

自分たちの行動は愚かで一人よがりだと。そしてクラウドに最後通告をして、己の思いをぶつけろ、とも。

そのセフィロスすら何も言わずに傍観するのは、何かしらの理由があるはずだ。だが、その理由がわからない。

「何を企んでいるんだ？」

小さく呟かれたフリオニールの言葉は、近くにいたウォーリアとテイダ、そしてスコールにしか届いていない。

「何のつもりなの？」

それに対してティナの言葉は透り、空気を震わせた。

しかし、誰も答えない。それどころか、幾人かは先が見えているとでも言いたげに退屈そうだ。

「何でもいいさ、好都合だぜ。奴らに戦意がないんだったら」

ジタンはそこで言葉を止めるものの、みなまで言わずとも誰もが理解していた。

今が、チャンスだということ。

何かの罨かもしれないと危惧しながらも、そのような様子さえ見え

ないことに拭えない違和感が消えない。

そしてその危惧はすぐに現れ、ああこつこつことだったのかと、胸を刺すのだ。

その時空気を震わせたそれは、小さく、低い声だった。

「バツツ…」

彼の物とは思えないほど無感情だった。

「え、クラウド…ド？何？」

一瞬誰に呼ばれているかわからなかったために、バツツの反応は遅れる。

「離せ」

「あ、痛かった？ゴメンゴメン、力緩めるから」

「いいから、離せ」

「え？」

有無を言わさぬその声と圧力に屈しかけ思わず腕を離しそうになった。しかし、

「バツツ、絶対に離すな！」

スコールの叫び声に、バツツは咄嗟に腕を強く握った。後一瞬でも遅ければ、クラウドはもうそこにはいなかっただろう。彼の表情に悲しみがよぎるものの、それは刹那のもので誰の目にも止まることなく消え去った。

「クラウド、どうしたんだい？今、君、何を……」

セシルは一步踏み出しながらクラウドを見つめた。だが、どうやらクラウドには話すつもりはないらしく、セシルを見ることはなかった。彼の視線はバツツに掴まれた腕に留まっている。

「仕方ない、か……」

「っ！」

クラウドは呟くと同時にバツツの腕をひねり自らの腕を抜く。そして光の粒子が形づくったバスターソードをバツツへと突き付けた。思いもよらぬクラウドの行動に、バツツは、光の戦士たちは身じろぎ一つ出来なかった。ただただ啞然としているだけだ。

体を横に向け、バスターソードを突き付けた右腕をこれ以上ないほど伸ばし、今取ることの出来る最大の距離を保つクラウド。顔を伏せているために、誰にもその横顔すら見ることは叶わない。

「え、ちよっ、クラウド、何やってるっすか！」

焦燥に駆られたティータが駆け寄ろうとするも、バツツに突き付けられていたバスターソードは一瞬でティータへと向けられる。磨かれたその切っ先を向けられ、さしものティータもおののいた。

「うおっ?!危なっ！」

慌てて足を止めたティータの目前で鈍く光る切っ先に迷いはない。いつ自分の前から動かされたのかわからないバツツは啞然としたまま、伏せられたクラウドの横顔を見つめていた。

クラウドの行動から、もう、戻らないという彼の強い意志がかいま

見える。

「何をしてるんだ、クラウド」

「冗談キツイぜ？」

スコールの真剣な声にも、ジタンの少しふざけた声にも、心なしか動揺が見える。

決して、短い付き合いではないのだ。その付き合いの中で誰もが理解している。彼は、冗談でこんなことをしないことを。だからこそ、誰もが信じられない。

彼らの間に、緊張と動揺が広がった。

「冗談？それこそ冗談だろ」

上げられたクラウドの顔を見た彼らは息を呑む。今までに見ていた感情のあった表情が嘘だと思わせられるような能面のように無表情で、無感情。声にもまったく感情がなく、誰が今の言葉を彼が言ったと信じる事が出来るだろう。

「俺はこんな冗談なんかしない。もちろん、言つつもりも、ない」

一切を拒絶した聞いたことのない低いその声に、息を呑んだのは誰だったのか。それとも、光の戦士たち全員だったのか。

混沌の戦士たちを先ほど興味なさげにしていた者も含め、今や全員が面白そうに現状を眺めている。ガーランド、皇帝、セフィロス、アルティミシアの四人には、こうなることまでの予測がついていたのだろうか。

「クラウド、もう戻ってこないの？」

オニオンの声は震えていた。しかし、それはこの現状に畏怖してではない。少年が恐れているのはクラウドを失うということ。敵対するということ。有り得ないと信じていても、頭のどこかでわかってしまっている。考えてしまふと声が震える。いくら普段虚勢を張っていてもやはりまだ十三歳の子ども。仲間を失うことを大人でさえ恐れるというのに、彼に恐れるなというのは酷なものだ。クラウドは表情を変えず、そんなオニオンを見やる。その瞳にいつもの優しい色はなく、何の感情も浮かんでいない。

「俺は、アンタたちをどんな形であれ裏切った。それでのこのこ戻れるとでも？俺はもう、戻れない」

「だが、あれは無理矢理連れていかれたんじゃないか！クラウドの意志なんて、あつてないようなものだった。俺たちはそれを裏切りだなんて思っていない。だからこそここにいるんだ」

フリオニールの必死に訴える様は印象的だった。その言葉が、裏切りと思っていないという言葉が嬉しくて。

クラウドの心が一瞬揺らぐ。

その時、まるでその揺らいだ心を戒めるかのように背後で微かに鐸鳴りが生じた。

その冷たい非情な音に、音を立ててひび割れる瞳。交わされた必死の約束が、言葉が思い返される。

『……あいつらを、消すな』

『時が戻った時に、あいつらの中から俺の存在とこの取り引きを消してくれば、それでいい』

『こちら側でいる限り、よほどのことは起きない。だが、お前がもしも戻ろうとすれば……』

その瞬間、消えることとなるだろう。

フリオニールの言葉に揺らいだ心は、鐸鳴りによって思い出された約束と言葉に消える。

あの言葉は今まさに聞こえた鐸鳴りの主のもの。彼になら可能なのだ。容易なのだ。アルティミシアの魔法によって辛うじてこの世界に残っている自分たちを消すことが。

わかっているわけではない。仲間の元へ戻ればアルティミシアの魔法が解けて彼らは間違いなく消える。その追い討ちが彼だ。今な

ら確信を持てる。魔法が解けて消える中で、躊躇いなく彼は斬り伏せるだろう。彼は　　セフィロスとは、そういう男だ。その狂気が現実のものとならないよう、もう、揺らぐことなどないよう心を凍てつかせ、仲間を　　かつての仲間を見た。

「帰って来いよ！俺たち、迎えに来たんだぜ？」

ジタンの言葉も、

「ね、帰ろう。クラウド」

ティナの言葉も、

「僕たち、仲間だろ？」

セシルの言葉も、

「君の犠牲など誰も望んでいない。我らの場所へと行こう、クラウド」

ウォーリアの言葉も、

「俺の意志は変わらない。戻ることなんて、今の俺には出来ない」

もう、クラウドには届かない。

「クラウド!!」

悲痛な思いがひしひしと伝わってくる声に対して、彼の声はあくまでも冷たく、無感動だ。

打ちひしがれる仲間たちに今生の別れを告げるにも、それさえも許されない。一度背を向けてしまった、大切に護りたいかつての仲間、甘いことを言ってしまうえば、そのまますがりたくなってしまう。すがってしまったえば彼らは消えてしまう。時が戻れば甦るのだろうが、それでも、自分のせいで彼らを消したくはない。

一度背を向けてしまったのだ。また向き合えることなどないだろう。

「もう、俺には……」

剣を変わらず突き付けたまま、ゆっくりと体を向ける。

「俺には、迷うことは許されない!」

それは、一瞬だった。

クラウドはバスターソードを引き寄せると大きく真横に凧ぎ払った。生じた風圧を光の戦士たちはもろに食らう。

吹き飛ばされ膝を着く者、倒れる者。辛うじて、ウォーリア、フリオニール、セシル、スコール、ティードの五人だけは地に自らの剣を突き立てることで、どうにか同じ場所に立っていた。

「っ…クラ、ウド」

頭を左右に振って意識を明確にし、ティータはよろめきながら名を呼ぶ。剣にもたれながら立つその姿は弱々しく、痛々しかった。

意図的に力を押さえられたものだったとはいえ、傷だらけの彼らには十分すぎるものだ。そしてそれが、仲間と信じている者から向けられたものだから尚更である。身体的なダメージはもちろんのこと、精神的ダメージもかなり大きい。

ただ、彼らと同じだけ…いや、それ以上にクラウド自身も傷つき、心は血の涙を流している。それに気付くことが出来ないほどに、彼らは弱りきってしまったけれど。

人の心に一番敏感であるティータは、光の戦士の中で体力の少ない戦士に当たる。ここまで戦ってこられたのは、一重に今までの戦いで積んできたもののおかげだろうが、すでに誰よりも限界だ。

「っ…」

「ティータ、動かないで」

今にも崩折れそうな上体を、両腕で必死に支える彼女のもとにいるのはオニオンだ。足手まといになりたくないティータは、倒れ伏すことだけはしたくないと、顔を上げる。

「私は、大丈夫」

「だけど！」

「私よりも、クラウドよ。痛くないはずがないもの。こんなことして、彼が痛くないはずが、ないもの…」

「！」

聡い少年は気付いてしまう。彼女のそれだけの言葉で気付いてしま  
う。

どれだけ自分たちに暴言を吐いても、暴拳をふるっても、優しい彼  
は自分たちが受けた痛みをそれ以上に感じてしまうだろう。感じて、  
そしてきつと心が鳴いて、泣いてしまうのだろう。

クラウドへ視線を向けても、その様子はまったく見ええない。まるで、  
鉄仮面を被って感情も何もかも隠してしまっているようだった。

「もう話は終わりだ。俺の居場所はない。戻る場所なんてない」

そう、裏切った俺が戻れる場所なんて、どこにも。

言外に含まれた言葉は彼の胸の内で消化される。

誰にも本当の思いを告げられなくなる日が来るとは予想していなかった。しかし、これほどの苦しみと悲しみは彼らに味あわせたくない。自分が思いを閉じ込めることによって救うことが出来るなら、その痛みさえ惜しくはなかった。

「居場所はある。クラウド、我らは君の……」

「わからない奴らには何を言ってもこれ以上は無意味だ」

ウォーリアの言葉を遮ったのは、今まで一言も発しなかった混沌の戦士。ギリリと彼の瞳は険に輝いた。

「エクスデス……お前に何がわかるんだよ！」

立ち上がったバツツの叫びに見え隠れするのは怒りと当惑。微かに揺れる彼の瞳が心情を如実に現わしている。しかし、当のエクスデスはフアフアフアと笑うだけだ。

「……誰も、何も言ってもくれないんだね」

ティナは切なげに目を伏せる。オニオンが隣で支えているものの、

ティナにかける言葉は見つからず、じつと地面を見つめている。

「結局、そう言うことだ。どうせアンタたちにはわからない。これ以上、何を言っても無駄だ」

はねのける冷たい言葉に、幾人かがビクリと肩を震わせる。

わからない。

クラウドが何を考え、何をしようとしているのかわからない。

自分たちに向けられていた優しい瞳は姿を消し、今やそこにあるのは冷たい色をした蒼い瞳。

ただ一心に縋るようにして自分を見つめる仲間たちをこれ以上なくらい冷ややかな目で見れば、恐怖とは違う別の何かが彼らの瞳に生じる。

クラウドが冷たく、突き放すように言葉を放つのはわざとだ。冷たく接して、この場所から去ってくれれば何も言うことはない。

悪く思われていい。

恨まれてもいい。

どう思われてもいいから。

彼らが助かれれば、クラウドはそれだけでいいのだ。

優しすぎるその思いは彼の心を削り取る。その痛みは半端ない。心を削って放たれている言葉はクラウドの心にもないでたらめなものばかりだ。嘘と偽りで塗り固められている。

そんな虚言ばかりを叩きつけければ、クラウド自身の心が痛むのも当然のことと言えよう。

「嘘、だな」

しかし、突然生じた否定の声。  
その場の全員の視線が彼へと集中した。

「スコール？」

目を細め、クラウドは訝しげに彼を見た。  
立っている彼は動揺もなく、クラウドの冷やかな視線を真っ直ぐに見返していた。力強い瞳は眩しく、クラウドは先ほどとは別の意味で目を細めた。  
全員から受けている視線に気付いていないような様子で、スコールはクラウドをじっと見据える。

「アンタの言っていることは嘘だ」

スコールの遠慮のない言葉はクラウドの胸に突き刺さる。しかし、胸に広がる動揺を誰にも悟られぬよう冷たく鋭い言葉を紡ぎだす。

「何が言いたいんだ？悪いが、そういう突拍子のないことを言う奴を相手にするのも疲れるんだ。騒がしいし、年下のアンタたちの相手はもう疲れた」

肩落として見せれば、幾人かが身じろぎする。  
本当はまったく違う。

突拍子のないことを言うのを聞くのは楽しくて、騒がしい彼らを見ているのは面白い。慕ってくれ、信頼してくれる彼らの相手にまったくではないが、疲れたことはほとんどない。  
そんな思いが胸中を満たしていくが、喉元まで出かかるそれらを押し込める。

「もう、いいだろう？嘘言ってるアンタだって、辛いはずだ」

しかし、スコールは全てを見透かしているように口を開く。

「クラウド、俺たちの付き合いは短くない。だからわかるんだ。アンタがそんなことを本気で言わないことぐらいわかっている」

クラウドは心のたがが外れそうになった。だが、ギリギリのところ  
で何とか押さえ込み、無表情を装ってスコールを見返した。

「クラウドはさ、俺たちのこと、わかってるようであってないよな」

床に刺さった剣を抜き取るフリオニールの表情はどこか清々しい。  
それに伴って他の七人も見てみれば、その瞳に力強さが戻っている。  
スコールに気をとられて気付かなかったのだ。

「こんな俺たちでも、クラウドの仲間として今までやってきたんだ。  
クラウド自身が思ってるより、俺たちはクラウドのことをわかって  
る」

フリオニールの言葉もやはり真っ直ぐで、胸に突き刺さる。  
仲間たちの自分を見る視線が眩しかった。

知らず知らずに歪む表情は、彼らの優しさに当てられたからだ。

知らず知らずに握り締められる左手は、彼らの言葉や態度の温かさ  
に当てられたからだ。

知らず知らずに噛み締められる口元は、彼らの存在が嬉しいからだ。

細められていた目は閉じられ、その瞼はほんの微かに震える。

「どうしてそんなことが言える？今まで俺は影で嘲笑っていたかもしれないぞ？」

ようやく捻りだした言葉を、クラウドはとても陳腐だと思った。その言葉を彼らはどう受け取ったのか、全員が顔を見合わせている。多くの視線を感じ、クラウドは目を開け、視線を上げた。その途端、揺らいでいた瞳は驚愕に彩られ、見開かれる。

九対の力強い瞳は、迷いなくクラウドを見つめていた。

『クラウドを、信じているから』

クラウドは、自分が射ぬかれたように感じた。彼らを直視出来ずに視線を落とす。クラウドのその行動は言葉を否定するものではない。これ以上、嘘について騙すことが、出来ない。

大切な仲間たちは、まだ信じてくれている。あれだけ酷いことを言ったのに、まだ信じてくれて、裏切りじゃないと言ってくれて。

「クラウド、帰ろう」

これ以上ないほどに心に染み渡った言葉に、頷きそうになった時だ

った。

パン パン パン

突如起きた乾いた音。

その発生源を探せば、それは混沌の戦士が一人、

「中々に面白い茶番劇だった。誉めてつかわそう」

皇帝だった。

乾いた音の正体は、何の感情も込められていない拍手。いや、ただ手を合わせて叩いただけだ。感情も何も籠もっていないそれは、拍手とは言えない。

「裏切られても尚、仲間を信じぬこうとするその心、まさに光。調和の神・コスモスに召還された駒なだけはある」

その場で一步踏み出す皇帝の見下す態度に、苛つきが高まっていく光の戦士。

「全く面倒だね。話してやった方が早く済むんじゃないかい？どうせ、忘れるんだから」

どうせ、忘れるんだから。

クジャの侮蔑の含まれたその声は光の戦士たち、そしてクラウドの中で反響し、心を揺さ振った。

「どういう意味だ？ “どうせ、忘れる” だって？おいクジャ、何を忘れるっていうんだよ！」

「愚かだね、ジタン。いや、君たちは。本当に愚かな選択しかしないね。知らずに時が戻っていれば、残酷な真実を知らずにすんだのに」

クジャの嘲笑を含んだ言葉に甦る光景は、守ろうとした一人の神が

消えた時のこと。真実を知らずに消えれば幸せと言われたことは、記憶に新しい。

あれは、コスモスが消えたのは光の戦士たちがクリスタルを集めたせいだということを暗に示していた、エクスデスとケフカの二人が言った言葉。

今回も、あれほどの衝撃を受けることになるのだろうか、身構える。

「ガーランド、もういいんじゃないかい？聞きたいみたいだし」

クジャの勧める言葉に、ガーランドは頷いた。

「何を勝手なこと！」

クジャとガーランドを見ていたクラウドは焦りに叫ぶ。

ようやく表情が変わったなど、ウォーリアは変なところで安心を覚えた。だが、クジャの言葉の方が今は頭を占めている。

一体、どうということなのか。

「願いを二つ、聞いた。それはあの兵士の願いだ」

「っ…！」

ガーランドの続く言葉を止めようと走り行こうとしたクラウドの目前に、突然白銀の刀身が踊り出る。意に反しながら足を止め、隣を見やれば、自分を見るセフィロスの姿。冷ややかな瞳でありながら、その口元は喜悦に歪んでいる。

「何をしている」

突拍子なセフィロスの言葉に眉を寄せた。それを見てとったのだろ

う。馬鹿にしたように笑うと、口を開く。その声は、ただただクラウドを嘲笑っていた。

「消えてもいいのか？」

思わず目を見開いた。

その言葉は暗に示している。今ガーランドの邪魔をすれば、仲間はいなくなるということ。力ない自分が情けなく、歯噛みした。

クラウドが何を　　自分すら引き替えてにしても護りたい仲間たち。だからこそ逆にいいように使われてしまう。

そんな二人のやり取りを視界の端に納めながらも、九人はガーランドから視線を動かさない。彼の言葉はそれほどまでに力があつただ。

「あの兵士は自らこの混沌の陣営に足を踏み入れた」

「そう仕向けた癖に！」

「オニオン」

「だって……………！」

ガーランドの言葉を遮るオニオンを戒めるようにセシルが名を呼ぶ。不満な彼はセシルを見上げるも、怒りをこらえている横顔を見て口を閉じた。

「過程はさておき、その身をこちらへと置き、すべてを失うことを厭わない兵士の願いを聞くことにした」

「それが、さっさから言っている二つの願い」

ティナはただ笑い続けるケフカを睨み付け、再びガーランドを見や

った。

「一つはもちろん……」

『……あいつらを、消すな』

「お前たちが消えぬことだ。これはお前たちの力量も関係するが故に、完全には承諾しきってはいないがな」

一度言葉を区切ると、九人の様子を眺める。予想の範囲内だったのか、彼らに動揺は見られない。

「もう一つは……」

その言葉を、クラウドはどれだけ止めたかっだろう。しかしそれは、行く手を遮るセフィロスの愛刀・正宗が許さない。そして仲間たちを守るために、消させないためにも、動けない。

『それと、時が戻った時に、あいつらの中から俺の存在とこの取り引きを消してくれれば、それでいい』

「先ほど兵士がこちらに来た時のやり取り、そして兵士の存在をお

前たちの記憶から消し去ることだ」

ガーランドによって告げられたクラウドの願いに、息を呑む、目を見開く、口元を押さえるなどの行動によって九人の驚きは明白だった。

クラウドは絶対に知られたくなかった願いが知られたことに黙り込み、顔を伏せていた。特にガーランドが言ってしまった二つ目の願いは知られたくなかった。

知ってしまったえば、優しい彼らは決してそれを許さない。何としても止めようとするだろう。しかし、もうアルティミシアを、時を戻すこの術を止める方法は恐らく存在しない。すでに戦って勝つ力の無い彼らは返り討ちに合うだけだ。

それが嫌で嫌でどうしようもなかったから、知られたくなかったのに、その思いは至極簡単に打ち砕かれてしまった。

「お前たちが、すでに我らに勝つことの出来る力もない程に弱っているお前たちがここにいられるのは、単衣にこの兵士の願いが故。それさえなければ、さっさと消し去って時が戻るまで静かな時を過ごせるわ」

おかげで退屈せずにすんでいるがな。

暗闇の雲は興味深そうに光の戦士たちの反応をつぶさに観察している。

言葉の出ない彼らに、ジェクトは軽く舌打ちした。情けない反応とあってしまう。この決断をしたクラウドがどれだけ苦しい思いをしたのかわからないわけではないだろうに。

だが、口を挟まずに見守ることに徹していた。カオス陣である己はクラウドに味方することは出来ない。そして、齒痒く思っているのは、決して自分だけではないことも知っていた。

少し離れた場所で、ジェクトと同じく見守ることに徹している男、

ゴルベージ。兜を被っているため表情を窺い知ることは出来ないが、いつも組んでいる腕が少し震えているように見えるのは、見間違いではないはずだ。

「クラウド……」

止まっていた時がその声によって流れだしたようだった。

再びクラウドたちへ視点を戻していたジエクトは、すでに視えてしまっているこの世界での結末を思い悲しみに目を伏せた。

光の戦士たちは各々どう感じているのか。

怒っているのか、呆れているのか、それはわからない。しかし、クラウドの思いは変わっていない。

かつての仲間で、大切な存在。

彼らを見返すことがクラウドには出来なくて、その視線は反らされたままだ。その頑なな態度が如実に現している。

「クラウド、本当に……」

先ほどのガーランドの言葉は真実なのだ。

何かを返そうとしてもそれは言葉になることなく消えていく。互いの視線が交わらないまま過ぎる時。クラウドは行く手を遮るものがなくなっていることにすら気付かなかった。

「……関係、ないさ。それは確かにクラウドが俺たちを思ってくれた願いかもしれない。けど、それは俺たちに……少なくとも俺には、動かないという理由にはならない！」

バツツの声は空気を震わせ、光の戦士たちを奮い立たせた。

「そうっすね。バツツの言う通りだ。クラウドが俺たちのことを思ってくれてるように、俺たちだってクラウドのことを大切に思ってる」

「バツツ……ティータ……」

クラウドが危惧した通りに事が運んでいく。このままでは、自分が戻っても戻らなくとも彼らは傷を負うだろう。

「今の僕たちの力は確かにちっぽけだ。それでも、仲間一人救えなくて、守れなくて、のうのうと生きるわけにはいかない。犠牲になる仲間がいるとわかって生き延びるより、僕はここで戦うことを選

ぶ！」

それが光の戦士だ。

力強い中に強固な意志が見えるセシルの瞳。

もう何を言おうとも、彼らは揺るがないだろう。

「クラウド、覚悟してね」

意味の取れない言葉に、クラウドは少し首を傾げた。覚悟とは一体何の覚悟だろう。

「後で勝手な行動をとったことを全員で叱ってやるからな。逃げるなよ」

オニオンの言葉を補ったフリオニールの言葉に、クラウドは呆気に取られた。まさかそんなことを言われるとは思わなかった。

ここが敵の陣営の真っ只中だと本当に理解しているのだろうか。

「そうと決まれば……」

「クラウドを、助け出すだけ！」

ウォーリアの言葉に続き、ティナは震える膝を叱咤して立ち上がる。誰もが見据えているのは、最早クラウドを救い出すことだけ。

「哀れだね。自分たちで残された時間を摘み取るなんて、信じらんない。お馬鹿にも程があるもんですよ？コスモスの戦士たち」

ケラケラケラと壊れたように嘲いだすケフカに続いて、あちこちで起こる混沌の戦士たちの嘲笑。その中でゴルベージとジエクトだけが、笑っていないかった。

「何やら楽しそうですね」

その時、突如として現われた魔女に、全員の視線が集った。

皇帝とガーランドの中間点に現われたアルティミアは、目の前に広がる光景を興味深そうに眺めると、刹那の間クラウドに視点を止めた。しかし直後にその視線はガーランドへと移される。

「ガーランド、準備は整いました。もう始まります」

「そうか。とうとう神龍が動きだすか……」

聞き慣れない言葉に光の戦士たちは眉を潜めた。この世界に来てからこの方、神龍などという言葉は聞いたことがない。

「さあ、そろそろお別れだな。次に会うのは間違いなく戻された時の中だ」

セフィロスはクッククツと独特の笑みを浮かべて笑うと、空を見上げた。

「ああ、もう直か」

目を細めるその表情はどこか歪んでいる。

天候は荒れ始め、雲が渦を巻き始めた。上空では風が荒れているのだろうか。

「一体、何が起きようとしてんだよ!」

悪態をつくジタンを、クラウドは寂しそうに見つめる。

これでもう、彼らが自分を思ってくれることはなくなることだろう。

「時が、戻ろうとしているのか？」

スコールの呟く声は、なぜか全員の耳に届いた。

「クラウドッ！」

切羽詰まったその声には恐怖が含まれている。その恐怖は最早、彼が離れ、犠牲になってしまっただけではない。

『クラウドを忘れてしまっ』

そのことに対する恐怖が含まれているのだ。

荒れた風は彼らの元まで降り始め、髪や服を揺らし始めた。このまま嵐になるのではないかという暴風が吹き荒れる上空。もう直その風が降りてくるだろう。

「時は満ちた。時間稼ぎも、茶番劇も、そして今、この場所にお前たちの存在も、必要ない」

兜に隠れた表情は嗤っているのだろうか。それとも、嘲っているのだろうか。ガールランドの声は、喜びに打ち震えているようだった。一段と風が強くなり始めた。今や光の戦士たちを取り囲むように風が渦を巻き始めつつある。竜巻へと変化するのも時間の問題だ。

「くっ、俺たちを吹き飛ばそうとしているのか！」  
「フリオニール、踏ん張るっす！果たしてない。俺たちはまだ、目的を何一つ果たしていないんだ！！」

ティーダの叫びに誰もが頷く。このままこの場所からいなくなってしまうえば、後悔は後を断たず、悲しみに暮れることになるだろう。例えそれが、彼を忘れてしまふまでの短い間だけだとしても。諦めない九人の姿に、クラウドはとうとう心動かされる。いや、元々動かされていた心を、今まで無理矢理封じ込めていたのだ。ようやく動かすことが出来たという方が正しいだろう。まったく動こうとしなかった彼が、一步、また一步と歩きだす。

「クラウド？」

風の壁を前にして、クラウドは歩みを止めた。荒れた風に近づいたことで彼の髪が風にさらわれている。

目を閉じて立つクラウドに仲間たちの表情は映らない。しかし、見なくとも手にとるようにわかる。

心配そうに、悲しそうに顔を歪めて自分を見ているだろうことが。スコールが言ったように決して自分たちの付き合いは短くない。これくらい、簡単にわかるのだ。

目を開けてゆっくりと仲間を見回した。想像と変わらない表情に笑みがこぼれる。それはいつもの、優しい笑顔。それを見た彼らの表情が驚愕に彩られながらも明るいものへと変化する。この笑顔が見たかった、と。

「クラウド、手を！！」



近くにいたセシルが手を必死に伸ばす。パラディンの風貌だからこそわかる、血の滲んだ手。痛々しい傷だが、意に介した様子はない。

「ポケットとするなよ、クラウド！」

気付けば、ジタンもその手を伸ばしていた。

クラウドはその微笑みを崩さぬまま両手を伸ばし、それぞれの手を取った。セシルとジタンから広がる笑顔。オニオンとティナは互いに頷き合っていた。

「クラウド・ストライフ……」

それは、アルティミシアの諫める声。しかしその続きは、他の者に遮られる。

「何のつもりですか、セフィロス。このままでは」

「問題ない。そういうことだろう？」

いつの間に来ていたのか、アルティミシアの隣には皇帝が立っていた。

「黙って見ている、ということなのだろう？セフィロス」

「……そういうことだ」

このやり取りを聞きながらもクラウドは微笑みを崩さず、手も離しはしなかった。なぜならば、皇帝、セフィロス、アルティミシアの言葉は、風の影響で中にいる彼らには届いていないからだ。だからこそ、態度を変えはしない。

この手の温もりを忘れないように。大切な、護りたいと思っただけでやまなかった、この異世界で唯一背を預けられる仲間たち。温もりを忘れないように刻み付ける。

笑った顔が見たいから。

例えばそれが、一瞬の偽りだとしても、今ここにあるのは心からの本物だから。

この我が儘を許して欲しい。

最後だから……。

「まずいな。流石にもう、耐えられない」

剣を地に突き刺して何とか今の均衡を保っているウォーリアだが、強風に体を揺さ振られる。鎧を着ている自分でさえこうなのだ。軽装の仲間にはもっと辛いことだろう。

「クラウド、早くこっちに来い！」

クラウドと真逆の位置にいたバツが声を張り上げる。しかし、その必要はなかった。一体どうしてなのかはわからないが、中にいる彼らの声は叫ばずとも風にかき消されることなく全員の耳へと届いた。

「クラウド」

セシルとジタンが、握っている手を引つ張った。だが、二人……九人の予想に反して彼は動かなかった。

「何、してんだよ。このままじゃクラウド一人置いて行くことになるだろ！」

ジタンの泣きそうな表情。声がすでに泣いている。

その声を耳にしながら、ゆっくりと彼は首を横に振った。

「いいんだ。これが俺の願いだ。ガーランドに告げた、俺の願い……」

「じゃあ、私たちの思いは、どうなるの？」

静かな言葉に、ティナは胸が張り裂けそうになる。だが、クラウドは何も応えずに微笑んだままだった。その微笑みの裏に、抱えきれぬほどの激情を隠して。

強くなってきた風はティナ、そして鎧を着ているオニオンすらさらおうとする。ガンブレードを地に刺してしたスコールが手を伸ばして引き止めるも、限界はすぐにやってくることだろう。時間の問題だった。

「最後の、頼みだ」

悲しみを孕んだその声に、誰もがはっと顔を上げる。少しだけ伏せられたクラウドの表情は悲しみに彩られていた。ゆっくりと、その顔が上げられていく。

「俺のことは、忘れて……戻された時の中で、しがらみ無く生きてくれ」

悲しい言葉は彼らの胸を突く。  
そして、とても寂しい笑顔だった。涙こそ流れていないものの、確かにクラウドは泣いていた。

「嫌だ！僕は忘れたくない。クラウドのこと、一緒に過ごしたことを忘れたくないよ！」

子ども特有の甲高い声が響く。いつも被っている大人の仮面はそこにはない。駄々をこねる子どものように少年は叫ぶ。

素直に思いを吐露し、叫ぶことの出来る彼を、クラウドは羨ましく思った。

オニオンは今にも泣きそうにその顔を歪めていた。よくよく見れば、なにもそれはオニオンに限ったことではない。ティナにティードもそうだ。全員、悲しみに顔を歪めている。

みな一様にクラウドを本当に慕っているからこそ。

幸せ者だな、俺は。

彼らの思いを裏切ったのに、傷つけたたのに、信じてくれる。こんなにも仲間たちから思われて、嬉しくてたまらない。だからこそ、護りたいと強く願う。

「頼むから戻ってきてくれよ！頼む、から……！！！」

ティードの声が震えている。ひしひしと伝わってくる思いから忘れたくない、離れたくないと、全身で訴えるその様は儚かった。

「出来ないさ」

どれだけ願おうとも。

声になったかどうかすらわからない小さな呟きは風にかき消される。すぐ近くにいたセシルとジタンすら唇の動きに気付かなかった。

風は先ほどよりいくばくも激しさを増し、とうとうみなを体をさらし始めた。最後の瞬間が近づいている。

最後の、別れの瞬間が……。

「自分勝手ですまない。……今まで、ありがとう」

その後、一人一人が風に包まれ浮上し始める。

「何だ？これは」

ウォーリアは怪訝に眉を潜めるも、今はそんなことを考えている場合ではない、とクラウドへ視線を戻した。

「自分勝手と言うなら帰ってこい。礼の言葉など、私たちが望むも

のか！」

その叫びに込められる思いはどれほどのものなのか。それは何を持ってしても測り知れることはない。

「俺のエゴだ。そんな俺のために悔やむことなんて、しないでくれ……」

自分の手を固く握っているセシルとジタンの手を無理矢理振りほどくと、二人を包む風の渦も完成した。

高く高く浮上していく彼らは血を吐くような思いでクラウドの名を叫び、やめてくれと叫び、待ってくれと叫び……。それでも無情にも距離は開き、壊れた神殿をあとという間に抜け出でた。

クラウドや混沌の戦士たちが見上げる中、九つの風は一つになると目にも止まらぬスピードである方向へ飛んで行った。

「こうなればもうすぐだな。奴らが秩序の聖域に降り立った時点で時が巻き戻る」

クルリとその場で反転すると、エクステスはゆっくりと奥へ入って行った。もう誰もが興味が失せているようだ。

「中々にいい戯曲だったよ。これから奏でられる曲が楽しみだ」

その端正な顔に微笑を浮かべ、クジャは姿を消す。

「俺には、何か言う資格はねえな」

ジエクトは柱に預けていた体を起こして立ち去る。その後にゴルベーザが言葉なく続いた。

「結局今は何ら変動はない。時が戻った世界で生じることが、すべてを変えることになるのだ」

杖で地を叩き、皇帝は溶けるように消える。

「わしらの思惑は達せられた。これで心おきなく休みをとれる」

暗闇の雲は宙にふわりと浮上すると、そのまま中央を横切り扉をくぐった。

「僕ちゃんも休もーっと。力使って疲れたし。ああ、でもボロボロのあいつら程じゃないですね」

歩き去りながらケラケラと笑い、クラウドを見てその場からケフカはいなくなる。

「神龍の力は絶大。歪みなく世界は戻るでしょう。あなたの選択だけを残して」

何枚かの羽が散り、アルティミシアは闇に包まれた。

「戻された時の中では動いてもらうこととなる。今の内に体を休めておくことだ」

鎧の音をたてながら歩いていくガーランド。

「お前の選択に間違いはない。クラウド、確かにお前は奴らに道を残したのだからな」

希望とも絶望ともつかぬ道を。

クラウドの隣を過ぎ去り、セフィロスは奥へと向かう。

一人になった広間で崩れ落ちるクラウド。両膝を着き、仲間たちが消えた空を見上げた。彼らの叫びが耳にこびついて離れない。目を閉じれば彼らの笑顔と悲しみの表情が瞼の裏をよぎる。

両手を顔の前で広げれば、まだ手の中に二人の温もりがある。逃したくなくて、祈るように拳を握った。

「……くっ」

噛み締めた歯の隙間から零れる嗚咽。

流れない涙の代わりのように、空から大粒の雨が降り注ぐ。

変わることもない天候が変わるのは、予兆だ。

激しさを増していく雨に打たれながらも、クラウドはその場から動かなかつた。

まるで、懺悔のように拳を額に当てたまま。

今までありがとう

さよなら

そして……「めんぱわい」

戻される世界の中で変わるもの  
果たしてそれは何なのか

誰かが望んだ結末は  
誰かにとって望まぬもので

悲しみに満ちる雨はすべてを洗い流す

失くなっていくのは何も一つではない  
誰も一つと定めていない  
失われるものは取り上げられ  
輝きの中へ封ぜられる

“ 忘れない ” という思いは失われ

輝きの中へ姿を消す

“ ありがとう ” という感謝の思いは失われ

輝きの中へ姿を消す

決して今までに生じることのなかった出来事が  
この異世界の歯車を狂わせる  
狂った歯車が動くのは  
果たしてどの瞬間なのか

雨音は声をかき消し  
嗚咽をかき消し  
涙をかき消す

十人がこぼすのは  
汚れのない真っ直ぐな思い

十人がこぼすのは  
欲にまみれた歪んだ思い

しかし  
本当にそうなのだろうか？

どちらも思いの強さに引けはなく  
思う本人には真実となる

一筋の小さな亀裂が入った世界  
誰も気付かずにそれは進行する  
いつかこの異世界の鍵となるだろうそれは  
今はまだ 姿を見せることはない

もうこの物語の主演は

神などではない

## 第四幕 湧き上がる悲しみ

破片の世界で生じる嵐  
風は荒々しく吹き荒れ  
雨は激しく槍の如く鋭い  
気温は下がりすべての温もりを奪い去る

各世界の荒れと戦士の心  
それは連動するよう同じに荒れる  
世界の激動が止まるとき  
戦士の思いは摘み取られ  
彼らは忘れ  
神との再会を果たす

調和の神は蘇る  
一人の戦士を犠牲にし  
一人の思いを受けとめて

神の嘆きは届かない  
忘れた彼らに届かない

神の記憶は欠けずに残り  
すべてを覚えて涙する

固い決意と共に彼はすべてを忘れゆく

再会の時

その瞳に満ちるものは

果たして一体何なのか？

時が戻りし世界の中

激変する世界の情勢

今までに姿を見せなかった

ある人物たちもが

歪みによって現れる

交わることのなかったものが

変わることのなかったものが

不変を織り成すこの異世界そのものを変化させる

重なった別の世界にいた二人

歪みが生じて同軸となった世界

その出会いが生み出すひずみ

異世界で変わり始めた流れは

果たして終わりを引き寄せるのか

激しく冷たい雨に打たれ、体は芯まで冷えきっていた。濡ればそつた身体を叱咤して立ち上がれば、服の端から滴が落ち、濡れた服は肌に絡み付いて離れない。

止まない雨はいつまで降るのだろうか。

空を見上げればその雨の勢いで目を開けることはおろか、息すら出来ない。凍える体を抱き抱えるように腕をさすっても、降り注ぐ雨の下では意味がなかった。まるで感覚が麻痺してしまったかのように、一切の寒さを感じない。完全に冷えきってしまったている。

「人間、雨に打たれて、寒さにやられて、死ぬことは可能なのか？」

自嘲気味に呟くクラウドの声は雨に掻き消される。もとより彼一人のこの場所に、誰も聞く者など存在しない。

彼の体力は既に限界に近かった。ずっと雨に打たれていたのだ。体力は削られている。精神など、仲間を見送った時点で限界だったかもしれない。

その刹那、一陣の風が吹いた。

「？」

今まで吹いていた、冷たく荒々しい風ではない。温かく、柔らかい風だ。

春風のようなそれは黒い雨雲を押し退けて、太陽の光を注がせる。

尚も風は吹き続け、地に溜まった水すらどこかへ運んで行く。冷えていたクラウドの体はその温かな風に包まれて感覚を取り戻していった。服も髪も、すべてがあつという間に乾き、雨の痕跡が消えていく。

どの世界でも同じことが起きていた。

調和の戦士が降り立った秩序の聖域でも、悲しみに暮れている彼らを温かな風が優しく包む。

そして時は戻される

目のくらむような神々しい光が地上に降り注ぎ、すべては変わらぬままに、変化した。  
そして生じる、彼らの変化。

「…私は、一体何を悲しんでいたのだ？」

ウォーリアは啞然としながら、ぽっかりと穴の空いたような胸を押さえた。

「忘れちゃいけなかったことを、忘れた気分だ」

持ち前の快活さはどこへやら、バツツは沈んだ面持ちで頭を掻きまわす。

「このぽっかりとした空虚感……何なの？」

その場にしゃがみこみ、ティナは震える両手を握り合わせる。

「わからないのに、どうして悲しいの？」

そんな彼女を支えながら、呆然と呟くオニオン。

「わかんない。俺は、一体何がしなかつたんだ」

ドサツと腰を落とすと、ティーダはそのまま空を見上げた。

「僕たち、何をしてたんだろう。それに、この……手に残る温もりは、一体誰の……」

掌に在る温もりがなぜか大切に思え、セシルは拳を握る。

「俺もだ。何なんだ？ 凄く大切だった気がするのに」

温もりの残る掌を胸に当て、ジタンは瞳を閉じる。

「わからないことがこれほど腹立たしいとはな。……イライラする」

乱暴に地を蹴るスコールに、普段の冷静さは見受けられない。

「それに、俺たちはカオスを倒しに向かっていたはずだ。なのに、どうしてここにいるんだ？」

フリオニールは空を見上げ、胸の空虚さに目を細めた。

間違いなく自分たちは何かを忘れてしまっている。大切な、とても

大切な何かを。しかしその空虚さ、忘れてしまったと感じたことすらも、時を経るにつれ消えていく。まるで手の中から水が零れるように自然に、跡形もなく。

九人の中から、“クラウド・ストライフ”という人間が完全に消え去った瞬間だった。

「俺たち、何やってるんだ？ここでボーツとしてる場合じゃないっす。早く、カオス倒しに行かないと！」

ティーダが焦りを見せた時だった。

『いいえ、まだです』

聖域中に、透き通るような声が響いた。その声は、

「え、嘘。まさか……！」

もう二度と聞くことが出来ないはずの、

「……コスモス」

神の声だった。

天候が元に戻り、空にはまた雲が立ちこめた。

「時が、戻ったのか…」

頭が霞みがかった気分ではんやりと眩く。

世界がどこか変わったようには見受けられない。しかし、確かに今、彼の立ち位置は永久的に変わってしまったのだ。

今頃、自分のことを忘れたであろう仲間たちに思いを馳せる。もう、会うこともないであろう大切な…。

「……」

クラウドは、手の中にバスターソードを出現させた。磨き上げられた刀身には、思い詰めた表情が映っている。その剣の柄を両手で握ると、平らな刀身へ額を付けた。ひやりとするその刀身に、なぜだか無性に泣きたくなった。

「今の俺をあんたが見たら、何て言うだろうな」

脳裏浮かぶ、太陽の様な笑顔を持つ男。左頬の十字傷や、オールバ

ツクのツンツンとした黒い髪が特徴的なクラウドの親友。  
生きている以上、二度と会うことの叶わない友。

「俺が死んだら…同じところに行けるかな」

顔の前から刀身をどけ、瞳を閉じると刃を己の首筋に添えた。

「願わくは…彼らの未来に幸あらんことを」

囁くように呟くと、刃を下へと滑らせる。

ガキイン！

「！！！！」

突然の衝撃と、耳元で響いた鉄同士のぶつかる鈍い轟音に固く目を閉じた。

その衝撃によってバスターソードが手の中から飛ぶ。いや、狙いはおそらくそれなのだろう。

気付けなかった。

「何をしている」

ここまで近くにいたのに、気配に気付くことが出来なかった。相手は気配を消してすらいなかったというのに、行動に移されるまで気付けなかった。

「質問を変えよう。何をしようとしていた？」

クラウドが瞳を開けると、感じていた通り、首筋には男の愛刀が突き付けられていた。その柄を握っているのは、

「セフィロス…」

彼だった。

険に細められているその瞳。少し視線をずらせば、少し離れた場所に、投げ出された剣が転がっているのが見える。

「答える、クラウド」

剣先が喉に触れる。このまま切り裂いてくれないだろうかと考える辺り、本当にこの世界に未練が無いのだろう。しかし、それは間違いだ。クラウドは未練を持っている。無いと思いつつも持っているだけで。

「あんたが見て、思った通りだと思うが？」

この状況に対して口答えの一つをするでもなく、クラウドは淡々と静かにセフィロスを見返した。そのあくまでも落ち着いた様子に、セフィロスは剣先が刺さらない程度にくっつと押した。

「そんなに死にたいか」

「俺の仲間はいつらだけだ。例えあいつらが俺を忘れても、俺を敵とみなしても、俺の仲間はいつらだけだ。あいつらと戦うくらいなら、死を選ばせてもらう」

「約束を反古にするつもりか？」

鼻で笑い、セフィロスは正宗を消すと、クラウドへゆっくりと近づいていく。

「俺が聞いた約束は、混沌の陣営へと来ること。その後のことまで聞いていない。俺は、俺が聞いた限りの約束は果たした」

だから、この後は俺の好きにして問題無いはずだ。それを聞くと、セフィロスはおもしろそうに口元を歪めた。どこか喜悅に歪むそれは、見ていて気持ちのいいものではない。それでもクラウドは近づくセフィロスから離れることも、視線を動かすこともしなかった。今彼から離れること、視線を外すこと、それは負けるに等しいことだとわかっていたからだ。

「確かにお前の言っていることは理に適っているかもしれん。だが……」

クラウドの目前でセフィロスは歩みを止めた。自分を睨むように見

上げるクラウドに歪んだ微笑みを向けたまま、言葉を続ける。

「私たちは混沌。お前もすでに混沌の兵士。混沌の一駒。今更抜けることなど不可能だ」

クラウドの顎を指で押し上げると、彼の耳元へ顔を寄せて囁いた。

「元々闇を抱え持つお前が、調和という光のままで、いつまでいられると思っな」

クラウドの瞳は、大きく見開かれる。その動揺は、自分の中に闇があるということを知っていたからこそそのもの。

「わかっているのだろうか？本来、お前はどこに身を置くべきか。光の中で生きられぬ、直視すら出来ぬお前が、どこにいるべきなのか……」

セフィロスの言葉がいやに脳内で反響する。まるで催眠術のようにクラウドの意志を誘い、闇へと導くその手法は見事としか言いようがない。

「俺が、いるべき……場所」

「そうだ。クラウド、お前がいるべきはこの混沌の陣営。お前は間違っして召還されたのではないかと思うほど、あの調和の戦士の中で闇にまみれている」

間違いという言葉に、クラウドの肩が震える。違っと言いたいのにな、声が出ない。まるで、喉が凍り付いてしまったかのようにだった。何

かを言いたいののに、何も言えない。それは、セフィロスの言った内容があまりにも常に頭の片隅にあった疑念に酷似していたからだ。相変わらず顎へ添えられているセフィロスの指。そこから伝わる動きで、セフィロスはクラウドが言葉を言うに言えないことを悟る。フツと笑うと、低い声で囁いた。

「お前もそう思っていたのだろう？ならば、あいつらが気付かないわけがない」

クラウドの瞳が凍り付いた。

セフィロスが言う“あいつら”とは、調和の戦士のこと。クラウドがこの世界で唯一信用出来る仲間。しかし、それがもしも虚実であったら？仲間と思っているのが己だけであったとしたら？コスモスに召喚されているから、混沌の駒としか思えない己と、仕方なく付き合っていたのであれば？

それほど残酷な事実はない。

「クラウド、お前は騙されていたのだ。あいつらはお前のことを何とも思っていない。ここへ来たのも、貴重な戦力を失いたくなかっただけに過ぎないだろう。結局、あいつらにとってお前は本当にただの“駒”としか思われていない。違うか？」

違う。あり得ない。そう否定出来る根拠がクラウドにあった。共に過ごした日々、交わした言葉や視線、そこに嘘偽りはなかった。だが、記憶とは曖昧なもので、言葉とは不思議なもので。無かったはずのものを、そこに見てしまう。

「そうだ。何も変わらない。お前は戦力と数えられていただけ。そこに信頼など、存在しなかったのだ」

セフィロスの言葉の中に真実は果たして存在したのか。  
セフィロスにとって、嘘でも構わない内容。ただ、クラウドを混沌  
に引き入れるだけに必要とするだけなのだから。

「調和の戦士にとって必要だったのは、“クラウド”という存在で  
はない。必要だったのは戦力なのだ」

“クラウド”という存在は必要とされていなかった。  
その言葉にやっぱり…という思いと共に、クラウドの瞳がひび割れ  
たる。これまで流れることのなかった涙が頬を伝う。脳裏な浮かぶ  
みなの笑顔の裏に、お前なんか必要ないという思いがかいま見えた  
気がした。

指に触れたクラウドの涙は、上手く事が運んだことをセフィロスへ  
知らせる。セフィロスは口元を歪ませると、体を起こし、彼へ向き  
直った。顎に触れたままの指をそのまま滑らせ、まるで壊れ物でも  
扱つかの如く、頬に手の平を優しく触れさせた。

その温もりだけで、クラウドの心は震える。その優しく感じられる  
温もりに惑わされる。

光の消えた青い瞳から流れ出る美しい輝きを持つそれは、セフィロ  
スの手を濡らしていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1880i/>

---

In the Returned Time-戻された時の中で-

2011年10月6日00時45分発行